



2010年度日本地球化学会年会のお知らせ(3)

主催：日本地球化学会

共催：日本化学会，日本鉱物科学会，日本質量分析学会，日本地質学会，日本分析化学会

会期：平成22年9月7日(火)～9日(木)

会場：立正大学熊谷キャンパス

埼玉県熊谷市万吉1700

交通：JR 高崎線・上越新幹線「熊谷」下車，バス立正大学行きで約10分，あるいは，東武東上線「森林公園」下車，バス立正大学行きで約12分。アクセスについては下記のサイトもご参照下さい。

http://www.ris.ac.jp/guidance/cam_guide/kumagaya.html

内容：口頭発表及びポスター発表，総会，学会賞記念講演，夜間集会，懇親会

口頭発表は，熊谷キャンパス19号館アカデミックキューブ2階教室のA～Eの5会場に分かれて行います。総会，学会賞記念講演はアカデミックキューブ1階のA101，夜間集会は同1階のインターネットカフェ，ポスター発表は20号館スポーツキューブ1階，懇親会はステラ1階食堂で行います。

若手発表賞：極めて優れた口頭発表・ポスター発表を行った日本地球化学会学生会員に授与します（ポスター発表での受賞者は懇親会の際に表彰します。口頭発表受賞者は後日学会ホームページで公表し，表彰状をお贈りします）。

プログラム：以下のページに掲載されております。

<http://www.wdc-jp.biz/geochem/2010/program.html>

講演要旨は8月末から，J-STAGE 上

<http://www.jstage.jst.go.jp/browse/geochemproc-char/ja/>

で公開されます。なお，要旨集の事前送付は行いません。学会当日に会場にて配布いたします。

年会当日の受付：アカデミックキューブ1階のエントランスホールで，初日の8時から開始します。

口頭発表について：口頭発表時間は，招待講演の一部を除き，討論を含めて15分です。講演を12分以内で終了し，3分の討論時間を残すようにして下さい。10分で第1鈴，12分で第2鈴，講演終了で第3鈴が鳴ります。なお，招待講演には討論時間も含め

て20分以上の場合がありますが，詳しくはプログラムをご覧ください。

発表には各会場で液晶プロジェクター1台のみ使用できます。Microsoft社のPowerPoint 2010をインストールしたノートパソコン(OSはWindows 7)を用意します。発表者は上記システムで実行可能な発表用ファイルをUSBメモリまたはCD-Rに記録して持参し，発表されるセッション前の休憩時間に各会場のノートパソコンに入れて動作を確認してください。会期2日目，3日目の朝一番のセッションで発表される方は，できるだけ前日のうちに動作確認を行ってください。上記以外のシステム(Mac, Keynoteなど)は極力避けていただきたいのですが，使用を希望される方はご自身で使うパソコンを持参の上，発表の2講演前までには液晶プロジェクターの脇で待機してください。

ポスター発表について：各パネルボードには発表番号が示してあります。ポスターボードはA0判縦(縦約120cm×横85cm)が貼れる大きさで，掲示するポスターの左上角に必ずポスター番号を明記して下さい。掲示に使用する画鋏・テープなどは実行委員会で用意しますので，会場で受け取ってください。初日，2日目とも13時から14時までそれぞれ1時間のコアタイムが設けられています。ポスター番号が1Pxxは初日，2Pxxは2日目がコアタイムです。すべてのポスターは初日の受付開始時刻より掲示可能ですが，各自のポスター発表のコアタイムまでに必ず掲示してください。発表者はコアタイムには必ずポスターの前に立って説明を行ってください。なお，ポスターは2日目の17時までに必ず撤去してください。それ以後も掲示しているポスターは，実行委員会が処分しますのでご注意ください。

参加予約申込：年会 web page

<http://www.wdc-jp.biz/geochem/2010/reg.html>

から，指示に従って申し込んでください。予約申込は8月23日(月)14時締切。これ以後は，当日受付をご利用ください。

参加登録費：(講演要旨集1部含む)

予約：一般会員5,000円，学生会員2,000円，

会員外7,000円，会員外学生3,000円

当日：一般会員6,000円，学生会員3,000円，

会員外7,000円，会員外学生4,000円

学部学生は無料(講演要旨集を含みません)

*なお，会員は日本地球化学会及び共催学会の会員を

2010 年度 日本地球化学会年会会場（立正大学熊谷キャンパス）への案内



JR 埼京高崎線・上越新幹線「熊谷」下車、バス立正大学行きで約10分
あるいは、東武東上線「森林公園」下車、バス立正大学行きで約12分
アクセスについては下記のサイトもご参照下さい。

http://www.ris.ac.jp/guidance/cam_guide/kumagaya.html



指します。当日受付で入会申込された方も会員扱いとします。

懇親会：9月8日18時よりステラ1階食堂。

予約4,500円(学生2,500円)、当日5,500円(学生3,500円)。今回は例年に比べ安く設定しておりますので、奮ってご参加ください。

追加の講演要旨集：3,000円/部(当日手渡し)(後日郵送の場合は3,500円/部)。

併設展示：関連機器メーカーその他による展示会を口頭発表のA～E会場と同じフロアにて開催します。多数の方のご来場をお待ちしております。

保育施設：1歳半以上のお子様を学内(アカデミックキューブ内)で一時的預かりするために、年会会場の立正大学の社会福祉学部で保育士および学生アルバイトを確保しております。年会参加者で、お子様の一時預かりをご希望の方は、参加予約申込締切の8月23日までに年会事務局までご連絡下さい。費用は1日3,000円(保険料込)です。

その他：実行委員会では宿泊・航空券等の斡旋はいたしません。各自お早めに手配ください。

年会事務局

〒360-0194 熊谷市万吉1700
立正大学地球環境科学部内
2010年度日本地球化学会年会
E-mail: gcsj2010@ris.ac.jp

●市民講演会のお知らせ

日本地球化学会では、年に先立ち、市民講演会を開催致します。会員の皆様もぜひご参加下さい。

行事名：市民講演会「地球と月の環境・資源を調べる化学マップ」

(主催：日本地球化学会、共催：立正大学)

日時：2010年9月5日(日) 13:30～15:00(13:00開場)

場所：立正大学熊谷キャンパス

アカデミックキューブ 1階A101

対象：中高生、一般市民(事前の予約は必要ありません)
プログラム(13:30～15:00)

1. 地球化学マップとは

田中 剛(名古屋大学・年代測定総合研究センター)

2. 月面の化学マップ

荒井朋子(千葉工業大学・惑星探査研究センター)

3. 立正大学での地球化学マップ作り

福岡孝昭(立正大学・地球環境科学部)

詳細は年会ホームページをご覧ください。

<http://www.wdc-jp.biz/geochem/2010/public.html>

連絡先・問合せ：

〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉1700

立正大学地球環境科学部 福岡孝昭

TEL/FAX: 048-539-1640

E-mail: tfukuoka@ris.ac.jp

お詫び

日本地球化学会ニュース No. 201に掲載した「小嶋稔名誉会員がV. M. ゴールドシュミットメダルを受賞」の記事は東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻 比屋根肇氏によるものです。

学会からのお知らせ

●2010年ゴールドシュミット国際会議報告

2010年の第20回ゴールドシュミット国際会議は、6月13日から18日までの5日間、米国テネシー州ノックスビルで開催されました。この会議は、Geochemical Society と European Association of Geochemistry が主催、日本地球化学会やその他の関連学会が共催する国際学会で、地球化学関連では最大規模です。開催地であるノックスビル周辺には、世界恐慌の対策として設置されたテネシー川流域開発公社(TVA)の本部やマンハッタン計画の一環として建設されたオークリッジ国立研究所があります。1982年には万国博覧会も開催され、その会場で学会が行われました。

学会の参加人数は約2200人と去年よりは500人程度減り、一昨年のバンクーバー開催と同程度の規模でした。会場は、旧万博会場だけに広くて綺麗で快適でした。十分なスペースが有るため、発表の合間やポスター発表時に周りを気にせずに議論ができたのも良かったです。また、口頭発表会場、ポスター発表会場、企業・学会等のブース、食事が、1つの建物内で行われたので、複数の会場で開かれるセッションをスムーズに回ることができました。口頭発表に関しては、プログラムの遵守が徹底していた様に思います。私が参加した多くのセッションでは、「発表時間」ではなく「発表時刻」を基準にしてプログラムを進行していました。その為、発表の開始と終了が概して正確だったと思います。この進行方法の短所として「発表時間を超過した講演」の次の発表時間が短くな

るという点がありますが、超過時間を複数の講演で吸収している様でした。従って、次の発表者だけが「割を食う」という感じではなく、上手い進行だなと感心させられました。

日本地球化学会では学会のPRの一環として、参加者に配布されるバッグの中に学会のパンフレットとGeochemical Journal (GJ) のExpress Letterのちらしを同封してもらいました。また、ポスター会場ではブースを設けてGJのCD-ROMや冊子体を無料で配布しました。ブースにはGJに興味を示す海外の研究者、入会を希望するアメリカ留学中の若手、かつて日本に留学していた研究者が訪ねてきてくれました。これら「公式」の役割だけでなく、ポスター会場での拠点、情報交換の場、待ち合わせ場所としてもブースは利用され、それなりに盛況だったと思います。会員の皆様は、来年度以降もお気軽にお立ち寄り下さい。

ゴールドシュミット会議において日本地球化学会が主催する行事に、GJ賞の受賞式があります。今年の受賞論文は、Bau & Koschinsky “Oxidative scaveng-

ing of cerium on hydrous Fe oxide: Evidence from the distribution of rare earth elements and yttrium between Fe oxides and Mn oxides in hydrogenetic ferromanganese crusts” Vol. 43, 37-47 (2009) でした。受賞者が学会に参加していなかったため、代理人に海老原会長から賞が授与されました。これ以外に日本地球化学会が関連する行事として、小嶋稔名誉会員（東京大学名誉教授）のゴールドシュミットメダル獲得がありました。この受賞は、日本人としては二人目、日本地球化学会会員としては初めての快挙です。研究内容や経歴等は日本地球化学ニュース No. 201（2010年6月）に掲載されています。受賞講演は、タイトルを変更して行われました。変更前のタイトルである「Xenon: Some Unsolved Problems」の「Unsolved」が、この数ヶ月間の研究で「Solved」にできそうだというのが変更の理由でした。この研究姿勢に敬意を表するとともに、受賞をお喜び申し上げます。

来年のゴールドシュミット会議はチェコ共和国の首都プラハで開催されます。欧州開催時は若手研究者の参加が増えるのが通例で、参加人数も大幅に増えます。会員、特に若手会員の参加をお勧めいたします。日本地球化学会には鳥居基金という海外派遣の助成制度もありますので、是非応募して下さい。基金の詳細は、<http://www.geochem.jp/prize/torii.html>にあります。

（産業技術総合研究所地質情報研究部門マグマ熱水鉱床研究グループ 下田玄、東京大学地震研究所折橋裕二）



写真1 日本地球化学会ブースの様子



写真2 Geochemical Journal Award 授賞式の様子

研究集会などのお知らせ

●山岳地域における大気化学・物理シンポジウム参加報告

2010年6月7日～11日、スイスのインターラーケンにおいて「山岳地域における大気化学・物理シンポジウム」(Symposium on Atmospheric Chemistry and Physics at Mountain Sites)が開催された。主催者は、ETH, PSI, EMPA, MeteoSuisse などスイスの研究機関に所属する研究者である。到着してまず驚いたことに、会場となったホテル・インターラーケンの隣には、滋賀県大津市との姉妹都市を記念した日本庭園があった。参加者は約100人で、やはりヨーロッパからの参加が目立ったが、アメリカや日本からの参加者も多く、それ以外にも中国、インドネシア、アフリカなどから参加があった。

講演は、山岳地域における観測研究が中心であったが、モデル研究も少なからずあった。また、研究分野は多岐にわたり、境界層からの輸送の影響、ベースラインモニタリング、長寿命気体、反応性気体、対流圏オゾンのトレンド、エアロゾルの光学特性、アジアにおける観測、核形成と雲、エアロゾルの化学組成、といったセッションが組まれた。ポスター発表も含め、総じて質の高い発表がなされたように思う。日本からは、4人が口頭発表を行った。まず、谷本浩志（環境研）が八方尾根におけるオゾンのトレンドを観測とモデルを用いて解析した結果を示した。「アジアにおけるエアロゾル観測」のセッションでは、長田和雄（名古屋大）が立山におけるエアロゾルに越境汚染が及ぼした影響について話し、三浦和彦（東理大）が富士山におけるエアロゾルのサイズ分布について講演した。松木篤（金沢大学）は富士山において行った新粒子生成の観測結果を報告した。

会議の印象としては、欧州では山岳地域における観測が非常に盛んである、ということである。北米での数は欧州ほどではないが、Dan Jaffe（ワシントン大学）が観測を行っているマウントバッチェラーでは多くの成果が生まれており、アジアからの長距離輸送とい

う点でも日本と関係が深い。アジアでは、2006年に開始された台湾のマウントルーリンにおける観測が非常に好調で、NOAAやWMO/GAWとも上手く連携しており、アメリカやヨーロッパの研究者からの認知度もかなり高いという印象を受けた。ジョージ・リン（台湾）は、私の個人的な知人であるが、観測秘話を聞くと彼がどれほどこの観測に情熱を持ち、粘り強くめげずに交渉して観測開始に漕ぎ着けたかがよく分かった。山岳地域における観測は、予算的にもロジスティックス的にも平地におけるそれよりもハードルが高い。「自分が多くの苦勞を背負い込んででもやるんだ！」という意気込みや覚悟のある人がいないとなかなか進まないのも事実である、と改めて認識した。

会議の最終日には、山岳地域における観測の重要性を行政関係者や一般市民に主張・広報する文章が全会一致で採択され、自由対流圏中の大気観測が本質的に重要であること、アジア・環太平洋地域における観測が少ないこと、とりわけ富士山における観測が非常に重要であること、が述べられた。次回のシンポジウム開催地は、米国のマウントバッチェラーが有力な雰囲気です。台湾のマウントルーリンを支持する声もあった。そして、それらに加えて「マウントフジでやりた



日本からは9人が参加した。左から、安成哲平（NASA/GSFC）、保田浩志（放医研）、上田紗也子、長田和雄（名古屋大学）、松木篤（金沢大学）、Johannes Staehelin（ETH-Zurich）、青木一真（富山大学）、兼保直樹（産総研）、三浦和彦（東理大）、谷本浩志（環境研）。

（写真 保田浩志氏提供）

い！」という声が主催者や聴衆から自発的に湧きあがったことも特筆したい。

最終日の11日には、ユングフラウヨッホ観測所への見学ツアーが企画され、登山鉄道を乗り継ぎ、標高3454 mまで片道約2時間で駆け上がった。HFSJG財団(High Altitude Research Stations Jungfraujoch and Gornergrat, <http://www.hfsjg.ch>)による観測所の歴史紹介や施設見学に加えて、微量ガスやエアロゾルなどの計測装置の紹介が行われた。帰路、EMPAの研究者がメンテナンスのためオゾン計を(そのまま梱包もせずに)電車に乗せて手で持って帰る姿が印象的であった。なお、ユングフラウヨッホの維持費は、年間で数千万円～1億円程度のものである。

さて日本を見るに、富士山(測候所3776 m)だけでなく、乗鞍(東京大学宇宙線研究所乗鞍観測所2770 m, 国立天文台コロナ観測所2876 m(2010年3月31日閉鎖)), 立山(室堂平2450 mと浄土山2839 m。両方とも富山大学の施設), 八方尾根(国設酸性雨測定局1850 m)など魅力的な観測所はいくつかあるが、残念なことに欧州に比べると施設の充実度は見劣りする上、昨今では施設の閉鎖も目立つ。ユングフラウヨッホ観測所から戻る電車の中で、富士山やその他のサイトの状況、日本における山岳観測の今後のあり方について、日本人研究者らでビールを片手に議論しつつ、チューリッヒに向かった。山岳地域における観測は、予算的にもロジスティックス的にも大変である。やはり費用対効果の議論(例えば、経費を圧縮できないか? 収入増加を見込める事業はないか? など)は大いに必要であろう。この不景気なご時世、日本だけではなく、研究者だけではなく、維持費を得て観測を発展させるためにアイデアが必要かもしれない。とにかく、日本の大気化学研究が「ガラパゴス化」しないようにしなければならぬ。

自由対流圏中の大気化学観測が重要であることを否定する人は、おそらくいないであろう。そのツールには、山岳サイト、ゾンデ、リモセン、航空機、など様々なアプローチが挙げられるが、精度の面ではゾンデやリモセンは山岳サイトや航空機には及ばない。例えば私の研究に近いところと言えば、対流圏オゾンのトレンド解析について地上観測とゾンデの不一致が多くの事例で見られるが、ゾンデの精度や継続性などに疑問を持つ声は少なくない。従って、ゾンデのデータを用いる場合には、20～30年にも及ぶ長期データの中から10年規模の変化を議論するわけである。しかし、人

間活動の変化が速く、将来の気候変動対策にも急を要する現在、起こっている変化をより早期に・より正確に検知することが必要で、数年規模で定量的な議論に耐えうる山岳サイトにおける観測の重要性は今までも増して高い、と私は思う。航空機か山岳サイトとか? という議論もある。山岳観測はやはり通年データによるトレンドや年々変動が出せることが何よりの長所である。そうでなければ、鉛直・広域分布が取れる航空機観測の方が(山岳観測よりも多額の費用が必要であるが)より魅力的になろう。この点を意識して、特に冬季における山岳観測をなるべく容易にする必要があると感じる。

(国立環境研究所大気圏環境研究領域大気化学研究室
谷本浩志)



院生による研究室紹介 No. 17

気象庁気象研究所地球化学研究部
第一研究室・第二研究室
(松枝秀和室長・石井雅男室長)

今回の研究室紹介は、気象庁気象研究所地球化学研究部からお届けします。当研究部には院生はいませんので、まだまだ気分は若手(?)な笹野大輔がご紹介します。

気象研究所は、気象庁の組織の一つで、気象・気候・地震火山・海洋などの地球科学を総合的に研究している国立試験研究機関です。その中でも地球化学研究部は文字通り、地球環境とその変化を化学的に明らかにすることを目的としています。最近では、二酸化炭素など温室効果ガスの大気増加と海洋吸収の変動を評価し、その人為的・気候的要因の解析に重点をおいて研究を行っています。

地球化学研究部では、緑川貴部長を中心とし、第一研究室5人、第二研究室4人、客員研究員1人の計11人で研究を進めています。この研究部の特徴は、何と言ってもその対象空間の広さにあります。対象が陸地生態だったり、海洋だったり、大気だったり。まさに陸海空です。その上、これまでは観測を主体として研究を進めてきましたが、ここ数年でモデラーも加わり、ますます多様になっています。また、もう一つの



写真1 第8回国際CO₂会議が開催されたイエナにて、空き時間の1コマ。
(左から)馬淵さん、坪井さん、石井室長、緑川部長、笹野、澤さん、松枝室長。



写真2 二酸化炭素標準ガス検定装置。奥に並ぶボンベは二酸化炭素の標準ガス。



写真3 白鳳丸の7研にて、船上での分析風景。手前が全アルカリ度分析装置、奥が全炭酸分析装置。

特徴は、気象庁の現業と強く結び付いていることでしょう。気象庁の大気観測点である綾里、与那国島、南鳥島での観測や、海洋気象観測船凌風丸、啓風丸による観測は我々には欠かすことができません。一方、気象庁の現業も、私たちの技術的なサポートを必要としています。

第一研究室では、大気化学環境の変動とメカニズムの解明を行っています。具体的には、温室効果ガスの時空間変動の観測、温室効果ガスの変動メカニズムの解明、陸域生態系過程を導入した気候モデルを使った

大気―陸面相互作用のモデル研究などです。中でも、日本航空の旅客機による上空の二酸化炭素の観測は1993年から続けており（2005年より国立環境研究所が主体）、アジア太平洋域上空を中心に、高い頻度で温室効果気体の時間・空間分布の観測を行い、大量のデータを収集しています。収集した観測データはデータベース化し、全球の炭素循環の解析に利用するとともに、インバースモデルや温室効果気体観測衛星の精度向上に役立てています。

第二研究室では、海洋の炭素循環の変動とメカニズ

ムについて研究を行っています。具体的には、温室効果ガスの大気増加に伴う海洋吸収などを調べるための観測・品質管理手法を開発しながら、長期にわたって海洋観測を行っています。その結果、大気中の二酸化炭素濃度の増加に追従した海洋中の全炭酸濃度の増加を観測によって明らかにしてきました。また、分光光度法による高精度（0.001）の自動小型 pH 測定装置を開発し、海洋酸性化の実態についても研究を進めています。

研究部全体の活動として、全員参加のコロキウムが週に1回行われます。専門分野が違うメンバーが集まる中、積極的な意見が多く挙がり、議論が熱く盛り上がります。分野を異にするメンバーが同居する研究部だからこそ、お互いに情報交換ができ、さまざまな視点から議論することができるのだと思います。学会活動にも積極的で、昨年度はドイツのイエナで開かれた第8回国際CO₂会議に計7名で参加してきました。二酸化炭素全般に関する科学的な会議で、大気あり、陸域生態あり、海洋あり。まさに当研究部にピッタリで、我々にとって4年に一度のオリンピックとも言える会議でした。昼の部はもちろんのこと、夜の部もさらに熱く(?)盛り上がりました。少人数のためか、団結力もバッチリです。

研究の中で、観測にもよく出かけます。私は毎年のように観測のため船に乗っています。西部北太平洋での観測が主ですが、時に外航にでることもあります。昨年度は、白鳳丸に乗せていただき、なんと南極海で新年を迎えました。観測はハードで、船内生活は制限も多くてつらい思いもします（船酔いもするし…）が、普通の人にはできない貴重な経験をさせてもらっ



写真4 気象研究所のシンボル、高さ213mの気象観測用鉄塔（現在、取り壊し中…）。

ています。これも観測に力を入れている当研究部の魅力ではないでしょうか。

気象研究所はつくばにあり、緑がとても豊かです。敷地内には、露場もあります。そのためか、窓を開けるとキジの鳴き声が聞こえてきます。所内で散歩をしていると、野（良）ウサギを見かけることもあります。過去には、イノシシが出て大騒ぎしたことも……。そんな恵まれた環境で、我々は研究を行っています。地球化学研究部に興味をもたれた方は、ぜひ気象研究所にお立ち寄りください。また、学会や懇親会等でお見かけの際は、気軽に声をかけていただければと思います。

以上、気象研究所地球化学研究部の紹介でした。

（気象庁気象研究所地球化学研究部第二研究室
笹野大輔）



書 評

「湖水爆発の謎を解く―カメルーン・ニオス湖に挑んだ20年―」

著者：日下部 実（岡山大学名誉教授、(現)富山大学客員教授）

出版社：岡山大学出版会、208ページ

2010年6月1日発行、857円＋税

ISBN 978-4-904228-12-8

難しい犯罪の捜査には、繰り返し現場を踏むことが大切と言われている。本書は、寝入りばなにたたき起こされて初動捜査に駆り出された日下部刑事が、二十数年の間文字通り現場を何度も踏みながら犯人象をプロファイルして、この犯罪が確実に繰り返されることを明らかにしながら再犯防止策を進めて来た経過と現状を自ら解説したものである。

事件は、1986年8月にカメルーン共和国の奥地で起こった。マールであるニオス湖の下流域に住む1746人もの住人と多数の家畜の死体が発見されたが、植物などには全く損傷がみられないという不思議なものであった。同様の事件が、2年前の1984年8月にニオス湖の南方約100 kmにあるマヌーン湖でも起こり、37名が犠牲となったことが知られるようになった。初期に提唱されたのは水蒸気爆発による火山ガス噴出説で

あったが、日本からの国際緊急援助隊の一員として現場を訪れた日下部さん達の、その後の度重なる綿密な地球化学的調査により、湖底に蓄積された膨大な量の炭酸ガスが爆発的に放出されたことが明らかにされた。この現象は後に湖水爆発（limnic eruption）と呼ばれるようになった。更に憂うべきことには、炭酸ガスの蓄積は着実に進んでおり、約100年後には同様の湖水爆発が避けられないことが示され、その防止策が焦眉の課題となってきた。日下部さんは、カメルーン政府機関やアメリカ、フランスの研究者たちとともにニオス湖とマヌーン湖を安全な湖にするためのガス抜きの実現に奔走した。このような顛末が、日本政府関係機関の無理解と援助が得られない悔しさも込められながら、詳しく書かれている。日下部さんが2001年度に受賞された地球化学会賞「カメルーン・ニオス湖ガス災害と地球化学」では、このような問題解決型の地球化学の推進が大きく評価された（日下部，地球化学 36, 137-147, 2002）。

私は幸運にも日下部隊の一員として、本書に書かれているカメルーン火山列に属する大西洋に浮かぶ火山島調査（1998年）、ニオス湖・マヌーン湖調査（1999年）、カメルーン山（Mt. Cameroon）およびニオス湖・マヌーン湖調査（2001年）に参加させていただいた。特に印象に残っているのは、交通手段が丸木船しかないアノボン島の素朴で親切な人々（囲み記事：西アフリカ沖の小島に楽園を見つけた！）、4000 m まで

登ったカメルーン山の噴火後間もない火口と新鮮な溶岩流、ガス抜きが始まって約10ヶ月後のニオス湖の噴水である。本書のカバー写真のように、間近から見る40 m もの高さに達する噴水は壮観であるとともに、湖底に秘められた底知れないエネルギーを考えると不気味でもあった。日下部さんは、鳥取県三朝町にある岡山大学地球内部研究センター在任中は、「気セリ（気が短いという意味で三朝で使われている）」で通っていた。その日下部さんが、決して物事が予定通りには進まない上に必要な道具や物資にも事欠くカメルーンで、実に粘り強い実行力を発揮して物事を進めているのを見て、敬服の思いに駆られたものである。

この本を読むには地球化学の知識をある程度必要とすると思われるが、実験室のような恵まれた環境でない状況下で未知の自然現象解明を進めていく困難さや達成感を、次世代を担う若い研究者や学生に学んでいただきたい。日下部さんのライフワークと言っても過言でないニオス湖に関わる仕事は、本書に書かれたところまでで終わったわけではなく、現在も続けられている。ニオス湖を将来にわたって安全な湖にして、周辺を安心して住める地域にするという、真の“問題解決型地球化学”が達成されることを期待している。

なお、本書は書店では販売されていませんが Amazon.co.jp で購入可能です。

（東京大学大学院理学系研究科・地殻化学実験施設
長尾敬介）

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

地球化学に関連した研究集会，書評，研究機関の紹介などの原稿をお待ちしております。編集の都合上，電子メールでの原稿を歓迎いたしますので，ご協力の程よろしくお願いいたします。次号の発行は2010年12月頃を予定しています。ニュース原稿は10月下旬までにお送りいただくよう，お願いいたします。また，ホームページに関するご意見もお寄せください。

編集担当者（日本地球化学会ニュース・HP 幹事）

谷本 浩志

〒305-8506 茨城県つくば市小野川16-2
国立環境研究所
大気圏環境研究領域

Tel：029-850-2930／Fax：029-850-2579

E-mail：news-hp@geochem.jp

鈴木勝彦

〒237-0061 横須賀市夏島町2-15
海洋研究開発機構（JAMSTEC）
地球内部ダイナミクス領域研究（IFREE）

Tel：046-867-9617／Fax：046-867-9315

E-mail：news-hp@geochem.jp

2010 年度日本地球化学会第 57 回年会
プログラム

会期：9 月 7 日（火）～ 9 日（木）

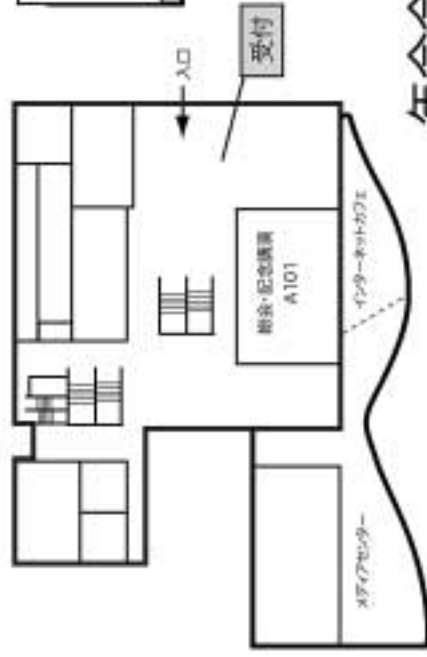
会場：立正大学熊谷キャンパス

セッションテーマ	日程・会場・ポスター番号
1. 同位体効果研究の地球化学への応用	3C午前, 2P33-37
2. 放射性廃棄物と地球化学	1B午前・午後, 1P07-12
3. 宇宙地球有機物とアストロバイオロジー	2E午前, 2P10-13
4. 南太平洋-パタゴニア地域の地球科学総合研究	2C午前, 2P08-09
5. 古気候・古環境解析の地球化学	1E午前・午後, 1P35-40
6. 地球化学と生理学の融合: 生体プロセスの研究から地球化学へ	1C午前, 1P13-15
7. 現世の有機物、微生物、生態系の地球化学的動態と過去の生命史の解明	1C午後, 1P16-22
8. マントル物質の化学とダイナミクス	3D午前, 2P43
9. ナノジオケミストリー・地球科学にまつわる基礎化学	3D午前・午後
10. 大気微量成分の地球化学	3A午前・午後, 2P26-32
11. 水-鉱物界面の地球化学	3D午後, 2P44
12. 水圏環境地球化学	1D午前・午後, 1P23-34
13. 初期太陽系円盤の宇宙化学	3C午後, 2P39
14. 惑星・衛星・小惑星の宇宙化学	3C午後, 2P40-42
15. Geofluids: 地球内部流体とその役割	1A午前, 1P01-02
16. 火成岩の地球化学	1A午後, 1P03-06
17. 土壌・陸域生態系の物質循環	3A午前, 2P21-25
18. 宇宙惑星化学 (全般)	3C午前・午後, 2P38
19. 固体地球化学 (全般)	2A午前, 2P04-07
20. 大気水圏地球化学 (全般)	2D午前, 2P14-20
21. その他の地球化学	2A午前, 2P01-03

月日	会場	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
9月7日 (火) 第1日	A A201				12 古生物学					16 気候変動の地球化学				
	B A203				3 放射線生物学					1 放射線生物学				
	C A204				6 地球化学と地質学の融合					7 環境の有機物、微生物、生態系				
	D A205				13 水圏環境地球化学					12 水圏環境地球化学				
	E A202				8 古生物・古環境学からの地球化学					9 古生物・古環境学からの地球化学				
	P SQ*						14 スター-1						夜間委員会	
	S A101													
9月8日 (水) 第2日	A A201				20 その他の地球化学									
	B A203													
	C A204				4 南太平洋-インド洋地域の地球科学総合研究									
	D A205				10 南太平洋地域の地球化学(南緯)									
	E A202				3 宇宙地球化学とアストロバイオロジー									
	P SQ*						14 スター-2							
	S A101													
9月9日 (木) 第3日	B ステラ													
	A A201				17 土壌・環境生物					10 大気圏成分の地球化学				
	B A203													
	C A204				1 新公体改訂研究の地球化学への応用					13 気候変動と大気圏成分の地球化学				
	D A205				8 マンガン・鉄					14 気候変動と大気圏成分の地球化学				
	E A202				9 マンガン・鉄					17 水-地圏界面の地球化学				
	P SQ*													
9月10日 (金) 第4日	S A101													

*SQ: Sports Office (20号館スポーツキューブ) **ID: Internet Cafe (18号館1階インターネットカフェ)

アカデミックキューブ1階

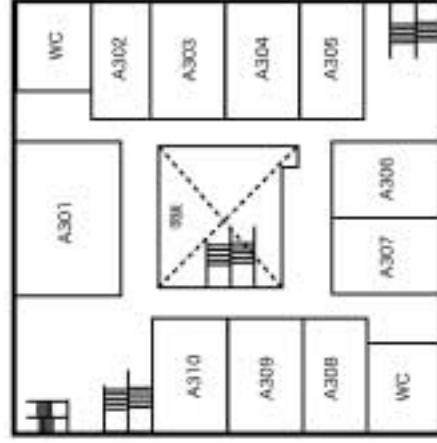


アカデミックキューブ2階



年会場図

アカデミックキューブ3階



20号館スポーツキューブ1階



A会場 (A201)

セッション 15. Geofluids: 地球内部流体とその役割

コンピーナー: 岩森光(東京工業大学)・小本曾哲(京都大学)・横山哲也(東京工業大学)

9:00-9:20 1A01 (15-01 招待)

地球内部の水素・水・流体を中性子で見える(東京大学) ○堀裕之

9:20-9:40 1A02 (15-02 招待)

地球内部流体のトレーサーとしての希ガス: その特徴と起源について(岡山大学) ○松本拓也

9:40-10:00 1A03 (15-03 招待)

伊豆小笠原弧におけるスラブ由来物質一時空変化からの新約(1) 産業技術総合研究所・2 海洋研究開発機構・3 テキサス大学・4 国立サウザンブロン海洋研究所) ○石塚治¹・湯浅真人¹・田村芳彦²・宿野浩司²・スターンロバート³・テイラー レックス⁴

10:00-10:15 1A04 (15-04)

島弧接合部におけるスラブ起源流体の分布と挙動(1) 東京工業大学・2 産業技術総合研究所・3 海洋研究開発機構・4 北海道大学) ○中村仁美¹・岩森光¹・石塚治²・木村純一³・中川光弘⁴・宮崎隆²・高橋俊郎²・平原由香²・常青²

10:15-10:30 1A05 (15-05)

「地殻流体の化石」としての熱水性鉱床の Pb 同位体組成(1) 東京大学・2 海洋研究開発機構・3 東京工業大学) ○藤永公一郎¹・加藤泰浩²・高谷雄太郎¹・谷水雅治²・岩森光²

10:30-10:45 1A06 (15-06)

海底熱水域硫化鉱物の U-Th 放射平衡による年代測定(1) 東京大学・2 岡山理科大学・3 九州大学) ○中井俊一¹・サファー ユービン¹・豊田新²・石橋純一郎³

10:45-11:00 1A07 (15-07)

塩化マグネシウム水溶液と塩化カルシウム水溶液の比熱と体積に関する計算式について(兵庫教育大学) ○池江靖弘

<休憩>

11:10-11:25 1A08 (15-08)

CO₂ フラクシングによるマグマの気泡成長・溶解過程(東北大学) ○吉村俊平・中村美千彦

11:25-11:40 1A09 (15-09)

草津白根山山頂火口湖「水釜」の水質経年変化と火山活動との関係(1) 上智大学大学院・2 上智大学) ○西本礼香¹・井上綾¹・木川田喜一²・大井隆夫²

11:40-12:00 1A10 (15-10 招待)

ヘリウム同位体比からみた2008年岩手・宮城内陸地震前後の深部流体挙動(1) 大阪大学・2 東北大学) ○堀口桂香¹・中山貴史²・松田達一¹

12:00-12:15 1A11 (15-11)

付加体中の断層における地震時の流体岩石相互作用(1) 海洋研究開発機構・2 大阪大学・3 東京大学) ○石川剛志¹・廣野哲朗²・本多剛²・濱田洋平³

12:15-12:30 1A12 (15-12)

元素の化学状態分析による岩石-流体相互作用における元素移動相の推定(1) 海洋研究開発機構・2 広島大学・3 筑波大学) ○谷水雅治¹・石川剛志¹・高橋嘉夫²・丸岡照幸³

B会場 (A203)

セッション 2. 放射性廃棄物と地球化学

コンピーナー: 日高洋(広島大学)・大貫敏彦(日本原子力研究開発機構)・吉田英一(名古屋大学)

10:00-10:15 1B01 (02-01)

同位体年代測定法の新第三系堆積岩中の地下水滞留年代への適用(三菱マテリアル株式会社) ○山口耕平・河田陽介

10:15-10:30 1B02 (02-02)

地下水中のコロイド試料回収・分析手法の確立(日本原子力研究開発機構) ○山本祐平・青才大介・水野崇

10:30-10:45 1B03 (02-03)

幌延深地層研究所における水理・地球化学特性評価技術開発の現状(1) 日本原子力研究開発機構・2 南緯功・天野由記・岩月輝希・村上裕晃・佐々木祥人・古川英樹

10:45-11:00 1B04 (02-04)

地下水有機物の微生物による利用性評価(1) 株式会社 JHI・2 日本原子力研究開発機構) ○福永栄¹・宮坂郁¹・古川英樹²

11:00-11:15 1B05 (02-05)

イオン液体により蒸着した微生物起源ナノ粒子の電子顕微鏡観察(1) 日本原子力研究開発機構・2 九州大学・3 大阪大学) ○大貫敏彦¹・香西直文¹・姜明玉²・宇都宮聡²・桑畑進³

11:15-11:45 1B06 (02-06 招待)

セレン酸還元細菌による金属硫化物の還元作用とその応用(1) 芝浦工業大学・2 大阪大学) ○山下光雄¹・清和成²・惣田剛²・池道彦²

11:45-12:00 1B07 (02-07)

幌延地域における珪藻質-珪質泥岩中のヨウ素の移行挙動解明(1) 広島大学大学院・2 日本原子力研究開発機構・3 東京大学・4 学習院大学) ○嶋本洋子¹・高橋嘉夫²・天野由記²・松崎浩之³・村松康行⁴・岩月輝希¹

C会場 (A204)

セッション 8. 地球化学と生理学の融合: 生体プロセスの研究から地球化学へ

コンピーナー: 沢田健(北海道大学)・カ石嘉人(海洋研究開発機構)

10:00-10:20 1C01 (08-01 招待)

アミノ酸窒素同位体比に基づく海洋生態系食物網構造の解析 (海洋研究開発機構) ○土屋正史・カ石嘉人・大河内直彦・高野淑謙・小川奈々子・藤倉克則・吉田尊雄・喜多村稔・Dhugal J. Lindsay・藤原義弘・野牧秀隆・豊福高志・山本啓之・丸山正・和田英太郎

10:20-10:35 1C02 (08-02)

アミノ酸の窒素同位体比を用いた生物の栄養段階解析 (海洋研究開発機構) ○カ石嘉人

10:35-10:50 1C03 (08-03)

アセトアルデヒドの分子内炭素同位体比のオンライン計測 (1 東京工業大学・2 キリンホールディングス) ○李鍾¹・山田桂太¹・服部良太²・柴田裕樹¹・吉田尚弘¹

10:50-11:05 1C04 (08-04)

古植生指標検討のための植物化石のテルペノイドバイオマーカー分析と生成過程の検討 (1 北海道大学・2 新潟大学) ○中村英人¹・沢田健¹・高橋正道²

11:05-11:20 1C05 (08-05)

陸上高等植物の抵抗性高分子の植物生理学・生物地球化学的研究 (北海道大学) ○沢田健・中村英人・荒井高明

11:20-11:35 1C06 (08-06)

白亜紀植物化石の抵抗性高分子を構成する分子ユニットの組成分布の多様性 (1 北海道大学・2 新潟大学) ○池田慧¹・沢田健¹・高橋正道²

11:35-11:55 1C07 (08-07 招待)

環境指標として有用なハマサシの骨格形成機構の解明に向けて (1 東京大学大気海洋研究所・2 琉球大学熱帯生物圏研究センター・3 産業技術総合研究所・4 東京大学大学院新領域創成科学研究科) ○井上麻夕里¹・日下部誠¹・日下部郁美¹・酒井一彦²・鈴木洋³・川幡穂高⁴

D会場 (A205)

セッション 12. 水圏環境地球化学

コンピーナー: 板井啓明(愛媛大学)・高橋嘉夫(広島大学)

9:00-9:15 1D01 (12-01)

淀川水系における化学成分の広域分布-主要化学成分による河川水の分類- (1 近畿大学・2 大阪市立大学・3 大阪市立自然史博物館) ○山中康平¹・中口謙¹・長谷川徹¹・冬野正史¹・益田晴恵²・中条武司³

9:15-9:30 1D02 (12-02)

多摩川における河川水・堆積物中の元素濃度分布および同位体比についての地球化学的研究 (慶應義塾大学大学院) ○岡田佑輔・鹿園直建

9:30-9:45 1D03 (12-03)

玉川酸性泉水由来の有害元素、レアメタルの拡散、堆積挙動に対する玉川ダムの影響 (1 慶應義塾大学・2 秋田大学・3 東北大学) ○岩根健太¹・鹿園直建¹・石山大三²・小川泰正³

9:45-10:00 1D04 (12-04)

酸性河川中での In, Ga, As, Pb の分別および堆積挙動に関する基礎研究 (東北大学) ○梶原雅博・小川泰正・土屋範芳

10:00-10:15 1D05 (12-05)

微量元素から見る琵琶湖の湖水環境変化 (1 京都大学化学研究所・2 滋賀県立大学) ○中嶋勇輔¹・清水明愛¹・宗林由樹¹・丸尾雅啓²

10:15-10:30 1D06 (12-06)

琵琶湖北湖底泥のマンガン濃集層の経時変化 (1 愛媛大学・2 琵琶湖環境科学研究センター) ○板井啓明¹・早瀬大輔¹・平田佐和子¹・兵部唯香¹・熊谷道夫²・田辺信介¹

<休憩>

10:40-11:00 1D07 (12-07 招待)

ヨウ素の水圏循環に与える微生物の影響 (千葉大学大学院) ○天知誠吾

11:00-11:15 1D08 (12-08)

有機物分解過程における重鉛の影響の定量的評価と沿岸物質循環に対する寄与 (1 筑波大学・2 愛媛大学) ○和田茂樹¹・鈴木聡²

11:15-11:30 1D09 (12-09)

茨城県久慈川河口域における溶存有機物の挙動に関する研究 (日本原子力研究開発機構) ○坂本愛・田中幸幸・乙坂重高

11:30-11:45 1D10 (12-10)

天然水中のフミン物質定量法の開発とその手法を用いた分布調査例-琵琶湖を中心として- (1 神戸大学・2 兵庫県立大学・3 滋賀県琵琶湖環境科学研究センター) ○津田久美子¹・白井秀門¹・光吉克敏¹・北野史子²・杉山裕子²・早川和秀³・藤樹暢英¹

11:45-12:00 1D11 (12-11)

溶存有機物特性からみた十勝堆積盆地東部の地下水水質形成 (財)電力中央研究所) ○伊藤由紀・宮川公雄

12:00-12:15 1D12 (12-12)

植物プランクトンにおける残留性有機汚染物質の濃縮過程の数値モデル (1 奈良女子大学・2 愛媛大学) ○瀬戸蘭美¹・半藤逸樹²

E会場 (A202)

セッション 5. 古気候・古環境解析の地球化学

コンピーナー: 入野智久(北海道大学)

9:00-9:15 1E01 (05-01)

享保の飢饉は、何故起きたか? : 樹木年輪同位体比から見た小氷期の東アジアにおける大気循環の特異性 (1 名古屋大学・2 北海道大学・3 信州大学・4 総合地球環境学研究所・5 鳥根大学) ○中塚武¹・大西啓子²・安江恒³・光谷拓実⁴・三瓶良和⁵

9:15-9:30 1E02 (05-02)

過去約 28,000 年に亘るバイカル湖柱状堆積物中の Long-chain mid-chain diols の古環境プロキシとしての可能性について (1 東海大学大学院・2 名古屋大学大学院) ○下川原誠¹・西村弥重²・松田孝信¹・秋山信彦¹・河合崇欣²

9:30-9:45 1E03 (05-03 招待)

テフラの化学分析と化学組成データの取り扱い方法～高精度テフロクロノロジーのために～ (立正大学) ○青木かおり

9:45-10:00 1E04 (05-04)

堆積物を用いた過去 30 年間の東京湾幕張沖における貧酸素水域の評価 (1 東京大学・2 産業技術総合研究所) ○小豆川勝見¹・金井豊²・松尾基之¹

10:00-10:15 1E05 (05-05)

過去1500年間の別府湾水温変動 (1 北海道大学・2 愛媛大学) ○山本正伸¹・市川紀夫¹・加三千宣²

10:15-10:30 1E06 (05-06)

北西太平洋日本沖堆積物コア中の陸上植物テルペノイドバイオマーカーの起源: 古気候指標の検討 (北海道大学) ○小林まどか・沢田健

10:30-10:45 1E07 (05-07)

フェオ色素の窒素同位体比を用いた日本海の暗色層(TL1, 2 および 3)形成時の海洋表層環境復元 (1 海洋研究開発機構・2 筑波大学) ○曾寿美¹・小川奈々子¹・柏山祐一郎²・大河内直彦¹

<休憩>

11:00-11:15 1E08 (05-08)

ナノ化石量に連動した海洋堆積物の窒素炭素同位体比と水銀含有量の第四紀気候変動 (1 九州大学大学院・2 環境科学技術研究所・3 東北大学・4 秋田大学・5 国立科学博物館) ○松崎哲也¹・小島淳¹・北邊郎¹・長谷川英尚²・千代延俊³・佐藤時幸⁴・林辰弥⁵

11:15-11:30 1E09 (05-09)

白亜紀-第三紀(K-T)境界粘土層に含まれる硫化鉱物のマイクロビーム蛍光X線マッピング (1 筑波大学大学院・2 海洋研究開発機構・3 京都大学大学院) ○丸岡照幸¹・西尾嘉朗²・小木曾哲³・鈴木勝彦³

11:30-11:45 1E10 (05-10)

海洋無酸素事象の発生条件: 栄養塩の流入率増大と浅海域の無酸素化の重要性 (東京大学大学院) ○尾崎和寿・田近英一

11:45-12:00 1E11 (05-11)

大規模火成岩岩区(LIPs)と海洋無酸素事象(OAE)とのリンケージ: 堆積岩の Os, Pb 同位体による制約 (海洋研究開発機構) ○鈴木勝彦・黒田潤一郎・谷水登治・大河内直彦

12:00-12:15 1E12 (05-12)

カナダ・ヒューロニアン累層群に記録された Os 同位体比が示唆する原生代初期氷河期直後における酸素濃度の上昇 (1 東京大学・2 海洋研究開発機構・3 千葉工業大学) ○後藤孝介¹・関根康人²・鈴木勝彦²・田近英一¹・仙田量子³・野崎達生³・多田隆治¹・後藤和久²・山本信治¹

A会場 (A201)

セッション 18. 火成岩の地球化学

コンピーナー: 佐野貴司(国立科学博物館)・三好雅也(京都大学)

14:00-14:15 1A13 (16-01)

海洋地殻を構成する噴出岩、貫入岩、はんれい岩の比較: 高速拡大軸下のマグマシステムの解明 (国立科学博物館・海洋研究開発機構・産業技術総合研究所) ○佐野貴司¹・榎山徹也²・山崎敬³

14:15-14:40 1A14 (16-02 招待)

太古代の海底熱水変質作用が示唆する当時の大気-海洋環境 (海洋研究開発機構・東京大学) ○中村謙太郎¹・高井研¹・加藤泰浩²

14:40-15:00 1A15 (16-03 招待)

玄武岩を利用した CO₂ の地中隔離 - 実験的アプローチによる CO₂ の固定効率の推計 - (東京大学・海洋研究開発機構) ○高谷雄太郎¹・中村謙太郎²・加藤泰浩³

15:00-15:15 1A16 (16-04 招待)

ホットスポット火山のマグマソースとその不均質性: フレンチポリネシア海底調査より (海洋研究開発機構・フランス海洋研究所) ○羽生毅¹・ドッソローレ²・谷健一郎³

15:15-15:30 1A17 (16-05 招待)

ロイヒ溶岩の硫黄同位体分別過程 (京都大学大学院・ウッズホール海洋研究所) ○山本順司¹・Shimizu Nobumichi²・Kurz Mark³

15:30-15:45 1A18 (16-06)

北西太平洋のブチスポット火山に産するアルカリ玄武岩の地球化学 (早稲田大学・東北大学・東京大学・海洋研究開発機構) ○町田嗣樹¹・平野直人²・加藤泰浩³・阿部なつ江⁴

15:45-16:00 1A19 (16-07 招待)

プレート収束域の海洋底火山岩ガラスの Li-Sr-Nd-He 同位体組成 (海洋研究開発機構・東京大学) ○西尾嘉朗¹・佐野有司²

16:00-16:15 1A20 (16-08 招待)

島嶼マグマの地球化学的マッピング: スラブ起源流体の挙動解明 (東京工業大学) ○中村仁美・岩森光

16:15-16:30 1A21 (16-09)

ホウ素を用いたスラブ由来流体の追跡-フィリピン海プレートの沈み込みと九州の火山活動- (京都大学・国立科学博物館・熊本大学・立正大学) ○三好雅也¹・佐野貴司²・長谷中利昭³・福岡孝昭⁴

<休憩>

16:40-16:55 1A22 (16-10 招待)

阿蘇火山における先カルデラから後カルデラ期火山岩の同位体比および全岩化学組成の時間変化 (熊本学園大学・筑波大学・京都大学) ○新村太郎¹・荒川洋二²・三好雅也³・柴田知之⁴

16:55-17:10 1A23 (16-11)

噴火様式の違いを反映した斜長石の含水量バリエーション-伊豆大島火山1986年噴火の場合- (東京工業大学・京都大学・東京大学・産業技術総合研究所) ○浜田達久¹・川本竜彦²・藤井敏嗣³・高橋栄一⁴・斎藤元治⁵

17:10-17:25 1A24 (16-12 招待)

新生代ユーラシア大陸東縁部背弧域の上部マントル: 北西九州と韓国玄武岩からの岩石学的制約 (海洋研究開発機構・東京大学大学院・東京大学・京都大学・長崎大学・岡山理科大学) ○榎山徹也¹・角野浩史²・中井俊一³・芳川雅子⁴・柴田知之⁵・長岡信治⁶・板谷徹丸⁷・常青⁸・宮崎隆⁹・高橋俊郎¹⁰・平原由香¹¹・小澤一仁¹²

17:25-17:45 1A25 (16-13 招待)

火成岩の化学・同位体組成からどのような地球深部の化学的環境を知り得るか?- キンバーライトを例として (東京大学地震研究所) ○兼岡一郎

17:45-18:00 1A26 (16-14 招待)

フラックスフリーフュージョン法による花崗岩の融分解 (海洋研究開発機構) ○清水健二・常青・中村謙太郎

18:00-18:15 1A27 (16-15)

長崎県野母崎東部に産する花崗岩質構造岩境のジルコン U-Pb 年代 (国立科学博物館・国立極地研究所) ○堤之恭¹・堀江憲路²・白石和行³・横山一己⁴

B会場 (A203)

セッション 2. 放射性廃棄物と地球化学

コンピーナー: 日高洋(広島大学)・大貫敏彦(日本原子力研究開発機構)・吉田英一(名古屋大学)

14:00-14:15 1B08 (02-08)

実構造物中のコンクリートの中性化における元素移動 (名古屋大学) ○南雅代¹・吉田英一²・浅原良浩³・丸山一平⁴

14:15-14:45 1B09 (02-09 招待)

NUMO2010 年技術レポートの取りまとめに向けた取り組みと地球化学への期待 (原子力発電環境整備機構) ○石黒勝彦

14:45-15:00 1B10 (02-10)

歩道放射線の多様性と天然放射線道路標識(Radio Guide Way)の提案 (名古屋大学年代測定総合研究センター・名古屋大学) ○田中剛¹・片岡良輔²

15:00-15:15 1B11 (02-11)

高アルカリ地下水を対象とした放射性廃棄物の安定地層処分のためのナチュラアナログ研究 (慶応義塾大学・財団法人原子力環境整備促進・資金管理センター) ○徳井佑樹¹・藤田直建²・山川稔³・藤井直樹⁴

15:15-15:30 1B12 (02-12)

バゴンベ天然原子炉上部に存在するジルコンの希ガス同位体組成 (総合地球環境学研究所・東京大学・広島大学) ○菊池麻希子¹・長尾敬介²・馬上一³・日高洋⁴

15:30-15:45 1B13 (02-13)

天然原子炉における高核分裂生成収率核種の長期的挙動 (広島大学) ○日高洋

C会場(A204)

セッション 7. 現世の有機物、微生物、生態系の地球化学的動態と過去
の生命史の解明

コンピーナー: 高野淑謙(海洋研究開発機構)・山中寿朗(岡山大学)・大庭雅寛(東北大学)

14:00-14:15 IC08 (07-01)

有機地球化学的手法による、南中国のプレカンブリアン・カンブリアン境界
近傍の環境変動に関する研究(東北大学) ○菊池みのり・海保邦夫・大庭
雅寛

14:15-14:30 IC09 (07-02)

セノマニアン期末東部北大西洋の古環境解明: 有孔虫絶滅と海洋無酸素
事象(東北大学・²グラナダ大学・³ラトガース大学) ○大庭雅寛¹・海保邦
夫¹・岡部高志¹・ラモルダ マルコス A.²・ライト ジェームズ D.³

14:30-14:45 IC10 (07-03)

地層中におけるピニルポルフィリンの反応挙動の解明(筑波大学大学
院・²筑波大学・³福岡工業大学) ○朝比奈健太¹・熊谷現¹・浅野純也¹・小
川洋平²・三田隆³・野本信也²

14:45-15:00 IC11 (07-04)

南極スカルプスネス露岩地域の淡水湖・塩湖堆積物のバイオマーカー分
析による古環境変動の復元(北海道大学・²海洋研究開発機構) ○竹田
真佑美¹・沢田健¹・高野淑謙²

15:00-15:15 IC12 (07-05)

海底堆積物中に棲息する細菌性アーキアの Lipidomics(海洋研究開発
機構) ○高野淑謙・カト喜人・大河内直彦

15:15-15:35 IC13 (07-06 招待)

海洋堆積物中のホバンポリオール類の起源について(北海道大学) ○齋藤
裕之

15:35-15:55 IC14 (07-07 招待)

有明海底質中のシアノバクテリア由来肝臓毒ミクロシスチンの数量分布と
諫早湾調整池排水トレーサーとしての可能性(熊本保健科学大学) ○高
橋徹

D会場(A205)

セッション 12. 水圏環境地球化学

コンピーナー: 板井啓明(愛媛大学)・高橋嘉夫(広島大学)

14:00-14:15 ID13 (12-13)

大阪府北河内地区の水銀抽出井戸と断層との関係(大阪市立大学) ○
益田晴恵・松井敬介・岡林克樹・前田俊介・吉岡秀憲

14:15-14:30 ID14 (12-14)

バングラデシュ南西部シャムタ村の地下水と素速度を支配している鉄鉱物
相の解析(広島大学大学院・²愛媛大学) ○石橋祐也¹・高橋嘉夫¹・板井
啓明²

14:30-14:45 ID15 (12-15)

SF₆(六フッ化硫黄)を用いた黒部扇状地地下水の滞留時間推定(富山大
学・²株式会社 地球科学研究所) ○柳岡みちる¹・張勤¹・浅井和由²

14:45-15:00 ID16 (12-16)

北西太平洋海山域における海水起源マンガンクラストの成長過程と組成
変動(高知大学・²東京大学大学院・³広島大学大学院・⁴ニュージーランド
地質核科学研究所) ○日井朗¹・佐藤久晃¹・田中真理子¹・清田徹²・得丸
純加³・高橋嘉夫³・坂口綾³・杉山敏基³・グラハム イアン⁴

15:00-15:15 ID17 (12-17)

西部北太平洋における生物活性微量元素の分布と動態(京都大学) ○グ
ーティ・ジェウ・フォン・河野友浩・宗林由樹

<休憩>

15:25-15:40 ID18 (12-18)

炭酸塩(CaCO₃)を用いた水溶液からのホウ素除去実験(慶應義塾大学大
学院) ○木次理美・鹿園直雄

15:40-15:55 ID19 (12-19)

固液両相のスペシエーション分析に基づくタリウムの水・土壌系での分配
挙動(広島大学) ○渡辺勇輔・嶋本洋子・高橋嘉夫

15:55-16:10 ID20 (12-20)

X線吸収微細構造法を用いた土壌中 Cr(VI)の価数変化に関する研究(東
京大学) ○堀まゆみ・小豆川謙見・松尾基之

16:10-16:25 ID21 (12-21)

大陸からの長距離移流による酸性沈着が石灰岩の溶解に及ぼす影響(九
州大学・²秋吉台科学博物館・³西海市役所) ○内田章太¹・配川武彦²・
諏訪勝郎³・栗崎弘輔¹・吉村和久¹

16:25-16:40 ID22 (12-22)

長距離輸送途上での黄砂中の鉄化学種の変化と鉄の水溶性(広島大
学) ○高橋嘉夫・東将之・古川丈真

16:40-17:00 ID23 (12-23 招待)

軟X線吸収分光法の最新動向-実環境における高分解能・高感度・局所分
析を目指して-(財団法人高輝度光科学研究センター) ○為則雄祐

E会場 (A202)

セッション 5. 古気候・古環境解析の地球化学

コンピーナー: 入野智久(北海道大学)

14:00-14:15 1E13 (05-13)

マイクロ X 線 CT 技術による有孔虫骨格破片を用いた海底堆積物中の炭酸塩溶解定量法の開発 (1 海洋研究開発機構・2 東北大学総合学術博物館・3 有限会社ホワイトラビット・4 北海道大学大学院・5 東京大学大学院) ○木元克典¹・佐々木理²・鹿納晴尚²・岩下智洋²・入野智久⁴・多田隆治⁵

14:15-14:30 1E14 (05-14)

地球化学分析のための極微量粉体回収法 ～炭酸塩の酸素・炭素同位体比分析を例に～ (海洋研究開発機構) ○坂井三郎

14:30-14:45 1E15 (05-15)

鍾乳石の希土類パターン規制要因と古環境推定 (1 成功大学・2 高知コア研究所・3 マリン・ワーク・ジャパン・4 台湾大学・5 九州大学) ○堀真子¹・石川剛志²・永石一弥²・林可⁴・黄國芳⁵・游鎮峰¹・狩野彰宏²・沈川淵⁴

14:45-15:00 1E16 (05-16)

山口県秋吉台の洞内滴下水中の Mg/Ca 比の季節変動 (1 九州大学・2 秋吉台科学博物館) ○栗崎弘輔¹・中尾武史¹・藤川将之²・吉村和久¹

15:00-15:15 1E17 (05-17)

淡水二枚貝イセエビガイの殻の Sr/Ca 比に影響を与える要因 (1 慶應義塾大学・2 東京大学・3 産業技術総合研究所) ○泉田悠人¹・吉村寿雄²・石村豊穂³・中島礼³・鹿園直建¹・鈴木淳³・川幡穂高³

15:15-15:30 1E18 (05-18)

淡水性長寿二枚貝カワシンジュガイ殻の古環境指標としての評価 (1 北海道大学・2 北海道大学大学院・3 東京大学) ○渡邊剛¹・香本佳彦²・白井厚太郎³

15:30-15:50 1E19 (05-19 招待)

造礁サンゴ骨格の Na/Ca 比の変動要因および骨格内での Na の存在状態 (1 無所属・2 名古屋工業大学・3 名古屋大学) ○三ツ口丈裕¹・内田哲男²・松本英二³

<休憩>

16:00-16:15 1E20 (05-20)

小笠原諸島父島と琉球列島石垣島のサンゴ骨格から復元された 20 世紀最初期の気候イベント (1 東京大学・2 産業技術総合研究所) 三島真理¹・○鈴木淳²・石村豊穂³・川幡穂高¹

16:15-16:30 1E21 (05-21)

鹿児島県鹿児島列島に生息する造礁性サンゴ骨格中の過去 68 年間の酸素・炭素安定同位体比解析 (1 北海道大学・2 高知大学・3 国立環境研究所) ○河村卓¹・渡邊剛¹・村山雅史²・山野博哉³

16:30-16:45 1E22 (05-22)

高知県竜串湾に生息する造礁性サンゴ骨格の酸素同位体比組成に与える黒潮流量の影響 (1 北海道大学・2 黒潮生物研究財団・3 国立環境研究所) ○山崎敦子¹・渡邊剛¹・角皆潤¹・中地シュウ²・山野博哉³・岩瀬文人³

16:45-17:00 1E23 (05-23)

和歌山県串本の近海域造礁性サンゴ骨格の酸素・炭素安定同位体比の変動 (1 北海道大学・2 東京工業大学・3 名古屋大学・4 串本海中公園センター) 井俣純平¹・渡邊剛¹・中村隆志²・阿部理³・○野村恵一⁴

17:00-17:15 1E24 (05-24)

鳥羽市神島石灰岩体の堆積年代と Sr 同位体組成 (1 名古屋大学大学院・2 名古屋大学年代測定総合研究センター) ○鈴木和博¹・浅原良浩¹・三村耕一¹・田中剛²

9月7日(第1日)ポスターセッション
P会場 (スポーツキューブ1階)、コアタイム 13:00~14:00

セッション 15. Geofluids: 地球内部流体とその役割

1P01 (15-P01)

溶融起源のシュートタキライトにおける微量元素・同位体分析 (大阪大学大学院・² 海洋研究開発機構・³ マリン・ワーク・ジャパン) ○本多剛¹・石川剛志²・廣野哲朗¹・向古秀樹³

1P02 (15-P02)

高温高圧条件下での水の構造変化 (京都大学理学研究科) ○熊谷仁孝

セッション 16. 火成岩の地球化学

1P03 (16-P01)

西南グリーンランド Itsaq 片麻岩複合岩体における始生代の火成活動の年代学 (広島大学・² ウーロンゴン大学) ○神市智之¹・日高洋¹・ナットマン・アラン²

1P04 (16-P02)

東南部、明るい輝に分布する花崗岩質岩の岩石学 (立正大学) ○川野良信

1P05 (16-P03)

JAMSTEC 深海底岩石サンプルデータベース「GANSEKI」(海洋研究開発機構・² マリン・ワーク・ジャパン) ○市山祐司¹・相馬伸介²・華房康恵¹・田村芳彦¹・川畑博¹・布川章子¹

1P06 (16-P04)

国立科学博物館統合データベース岩石鉱物 (国立科学博物館) ○横山一己・松原聡・宮崎律郎・佐野貴司・堀之恭

セッション 2. 放射性廃棄物と地球化学

1P07 (02-P01)

JAEA 東濃地科学センターにおける K-Ar 年代測定システムの現状と今後 (日本原子力研究開発機構・² 京都大学) ○山崎誠子¹・山田国見¹・花室孝広¹・梅田浩司¹・田上高広²

1P08 (02-P02)

花崗岩中の酸化還元フロント形成に伴う元素の挙動 - 地下深部と地表の対比 - (名古屋大学) ○山本鋼志・赤川史典・吉田英一

1P09 (02-P03)

高レベル廃棄物処分における水理特性を考慮したナチュラルアナログ研究 (東京都市大学大学院) ○入江寛和・本多照幸

1P10 (02-P04)

北海道根室地域における新層帯の主要および微量元素の分布と挙動 (東京都市大学大学院) ○鈴木孝太・本多照幸

1P11 (02-P05)

土岐花崗岩を対象とした水-岩石反応による微量元素の挙動に関する検討 (東京都市大学大学院) ○萩原武司・本多照幸

1P12 (02-P06)

北海道根室地域の稚内層硬質頁岩に含まれる He の同位体比とその空間分布 (電力中央研究所) ○柏谷公希・中田弘太郎・長谷川琢磨

セッション 8. 地球化学と生理学の融合: 生体プロセスの研究から地球化学へ

1P13 (06-P01)

南中国 Weng'an 地域のエディアカラ紀の地層から産出する微化石の窒素同位体比分析 (東京工業大学・² 東京大学・³ 東京大学大気海洋研究所) ○岡田古弘¹・小宮剛²・高畑直人³・佐野有司³・丸山茂徳³

1P14 (06-P02)

微生物のアミノ酸窒素同位体組成: 生物地球化学研究の新手法 (東京大学・² 海洋研究開発機構) ○山口保彦¹・高野淑典²・力石嘉人²・小川奈々子²・井町直之²・菅秀美²・横山祐典²・大河内直彦²

1P15 (06-P03)

兵庫県杉生新田の温泉中の微生物生態系と生物鉱化作用 (大阪大学理学研究科・² 大阪大学生活科学研究科) ○磯山陽子¹・益田晴恵¹・前田俊介¹・西川慎一²・小宮遼²

セッション 7. 現世の有機物、微生物、生態系の地球化学的動態と過去の世界生命史の解明

1P16 (07-P01)

日本近海のメタン湧出点における嫌気的メタン酸化古細菌の群集組成 (東京大学大学院) ○萩原成騎

1P17 (07-P02)

珪石の同位体分析によるシーラカンスの生息水深推定 (東京工業大学・² 海洋研究開発機構) ○和田亮一¹・坂井三郎²・二階堂雅人¹・相原光人¹・大河内直彦²・岡田典弘¹・山田桂太¹・吉田尚弘¹

1P18 (07-P03)

微量湿式分析による分子レベル同位体比の品質管理と精度向上: 特に Stable isotope probing 法の応用研究に向けて (海洋研究開発機構) ○高野淑典・力石嘉人・大河内直彦

1P19 (07-P04)

パルス放電ヘリウムイオン化検出器(PDHID)による天然ガスの無機・有機成分同時測定 (北海道大学) ○齋藤裕之・鈴木徳行

1P20 (07-P05)

河口域フミン酸の継続的観察と有効な評価方法の検討 (九州大学大学院) ○池田大介・山内敬明・奈良岡浩

1P21 (07-P06)

北海道古第三紀亜泥炭に含まれる気体成分の地球化学的特徴 (北海道大学) ○高橋幸士・鈴木徳行・齋藤裕之・長谷川精・角皆潤

1P22 (07-P07)

堆積盆地における各種炭化水素の安定同位体組成の変化 (北海道大学) ○鈴木徳行

セッション 12. 水圏環境地球化学

1P23 (12-P01)

愛媛県西条市市之川・加茂川の河川水・河床堆積物にみられる市之川鉱山の影響 (同志社大学大学院・² 同志社大学・³ 総合地球環境学研究所・⁴ 西条市役所) ○田畑重希子¹・横尾順子²・中野孝教³・徳増実⁴

1P24 (12-P02)

ホウ素から見た熱水循環系-トルードスオフィオライト、キプロス- (東京大学・² 海洋研究開発機構) ○松倉誠也¹・山岡香子¹・石川剛志²・川崎穂高¹

1P25 (12-P03)

日本海ガスハイドレート産出地域における間隙水中のヨウ素(¹²⁷I, ¹³¹I)、臭素及び微量元素の深度分布 (学習院大学・² 東京大学) ○安齋博哉¹・村松康行¹・松本良²・戸丸仁²・松崎浩之²

1P26 (12-P04)

加熱分離法による標準岩石中の Cl, Br, I 定量法の検討及び海底堆積物への応用 (学習院大学大学院・² 学習院大学・³ 東京大学大学院) ○関谷朋子¹・安齋博哉¹・村松康行²・松本良³・戸丸仁³

1P27 (12-P05)

ネパール・アンナプルナサーキットトレッキングルートの陸水-その水質組成と元素濃度 (中部大学・² 愛知県衛生研究所) ○大沼幸子¹・小池恭子²・伊藤徹²・加藤昌志¹

1P28 (12-P06)

二枚貝の特定部位を用いた沿岸域汚染指標の確立に向けて (名古屋大学) ○伊藤由喜・山本鋼志・林誠司

1P29 (12-P07)

群馬県赤城火山南部に分布する温泉の水質形成機構 (東京理科大学・² 石油資源開発株式会社) ○大平孟¹・村松容一¹・早稲田周²

1P30 (12-P08)

ジュンガル盆地南部の泥火山に関する地球化学的研究 (広島大学・² 北海道大学・³ 中国科学院・⁴ オタワ大学) ○中田亮一¹・高橋嘉夫²・角皆潤³・鄭国東⁴・清水洋¹・服部恵子⁴

1P31 (12-P09)

クッチャロ湖及び周辺河川におけるメタンの動態 (酪農学園大学) ○佐々木崇・大類壮央・吉田磨

1P32 (12-P10)

大阪湾における堆積物の化学組成 (1 名古屋大学・2 神戸大学) ○片岡良輔¹・山本順志¹・牛原康博²

1P33 (12-P11)

マンガンクラストへの金属フラックスの時間・空間変化 -北西太平洋・第5 拓洋海山の例- (1 高知大学大学院・2 高知大学・3 ニュージーランド地質核科学研究所) ○佐藤久晃¹・臼井朗²・グラハム イアン³

1P34 (12-P12)

バングラデシュ・シナルガオの地下水涵養域におけるヒ素汚染地下水形成 (大阪市立大学大学院) ○前田俊介・益田晴恵

セッション 5. 古気候・古環境解析の地球化学

1P35 (05-P01)

北海道砂流川における河川水中懸濁粒子と河口域海底堆積物の主要元素組成 (1 北海道大学・2 産業技術総合研究所・3 金沢大学) ○入野智久¹・池原研²・長尾誠也³

1P36 (05-P02)

最終氷期最大期のグリーンランド古気温復元と海水分布の影響:水同位体大循環モデルを用いたシミュレーション (1 海洋研究開発機構・2 東京大学) ○大堀内るみ¹・阿部彩子²・末吉哲雄¹・栗田直幸¹

1P37 (05-P03)

古海草試料を用いた北海道周辺の¹⁴C ローカル海洋リザーバー効果の検討 (東京大学) ○宮入陽介・松崎浩之

1P38 (05-P04)

石英の ESR 信号強度と結晶化度を用いた揚子江流域の特徴づけ (1 東京大学大学院・2 東京大学大学院・3 南京大學・4 岡山理科大学) ○古田知能¹・多田隆治²・Zheng Hongbo³・豊田新⁴

1P39 (05-P05)

深海サンゴ骨格におけるMg同位体分別の温度依存性:新しい古水温指標 (1 東京大学・2 海洋研究開発機構・3 産業技術総合研究所・4 高知大学) ○古村寿敏¹・谷水雅治²・井上麻夕里¹・鈴木淳³・岩崎望⁴・川幡穂高¹

1P40 (05-P06)

古生代 Sr 同位体比 minimum:古海山頂部石灰岩の連続記録 (1 熊本大学・2 東京大学) ○可児智美¹・小堀田大輔²・磯崎行雄²

A会場 (A201)

セッション 21. その他の地球化学

コンピーナー: 新正裕尚(東京経済大学)・平田岳史(京都大学)

9:30-9:45 2A01 (21-01)

地球化学圏と地名との関連性 -水銀と「丹生」を例として- (名古屋大学)

○永峰康一郎・茅野琴乃

9:45-10:00 2A02 (21-02)

元素周期表による地球化学教育推進プロジェクト (愛知教育大学) ○佐々田隆夫

10:00-10:15 2A03 (21-03)

元素・同位体分析を目的とした液中レーザーアブレーション法(LAL)の開発 (1 東京工業大学・2 京都大学) ○岡林謙起¹・横山隆臣²・横山哲也¹・平田岳史²

10:15-10:30 2A04 (21-04)

ガルバノメトリック光学系を用いたレーザーアブレーション-ICP 質量分析法による高感度元素分析 (1 京都大学大学院・2 海洋研究開発機構・3 産業技術総合研究所) ○平田岳史¹・横山隆臣¹・鈴木敏弘²・舘慶明³

10:30-10:45 2A05 (21-05)

親鉄性元素分析のための金属質標準物質の合成 (1 京都大学大学院・2 東京工業大学大学院・3 海洋研究開発機構) ○横山隆臣¹・今井崇暢²・横山哲也²・高橋栄一²・鈴木敏弘³・竹山雅夫²・平田岳史¹

10:45-11:00 2A06 (21-06)

飛行時間型二次イオン質量分析法(TOF-SIMS)による土器残存有機物を用いた古食性復元 (1 名古屋大学・2 国際基督教大学・3 弘前大学) ○宮田佳樹¹・斎藤香織¹・堀内晶子²・南雅代¹・上條信彦³・福島和彦¹・中村俊夫¹

11:00-11:15 2A07 (21-07)

地球大気中の He, Ar 同位体比変化について (大阪大学) ○荒川裕子・松田進一

セッション 19. 固体地球化学(全般)

コンピーナー: 平田岳史(京都大学)・新正裕尚(東京経済大学)

11:15-11:30 2A08 (19-01)

電解研磨による希ガス用質量分析計低ブランク化の試みと岡山大学における全希ガス分析及び K-Ar 年代測定の現状 (岡山大学) ○宮川千絵・松本拓也

11:30-11:45 2A09 (19-02)

逐次溶解法を用いた岩石標準試料中の元素の存在形態に関する研究 (産業技術総合研究所) ○久保田蘭・太田充恒・今井登

C会場 (A204)

セッション 4. 南太平洋-パタゴニア地域の地球科学総合研究
 コピーナー: 折橋裕二(東京大学地震研究所)・原田尚美(海洋研究開発機構)・阿部なつ江(海洋研究開発機構)・安間了(筑波大学)

9:00-9:15 2C01 (04-01)

南太平洋及び沈み込み帯における地質学・地球物理学的研究 ならびに
 テリ沖における海洋環境変動複合研究「みらい」MR08-06 航海概要 (1
 海洋研究開発機構・2 コンセプション大学・3 筑波大学・4 東京大学・5 東京工
 業大学) ○原田尚美¹・阿部なつ江¹・Lange Carina²・安間了³・折橋裕二⁴・
 岩森光⁵

9:15-9:30 2C02 (04-02)

マゼラン海峡堆積物に記録された過去 13,000 年間の全有機炭素・全窒素
 フラックス変動 (1 筑波大学・2 海洋研究開発機構・3 コンセプション大学・4
 放射線医学総合研究所・5 山形大学) ○福田美保¹・原田尚美²・佐藤都³・
 Carina B. Lange⁴・阿波根直一⁵・Silvio Pantaja³・川上創²・青野慶雄⁴・本山
 功⁵

9:30-9:45 2C03 (04-03)

南太平洋における浮遊性有孔虫の遺伝的多様性 (1 東北大学・2 海洋研究
 開発機構) ○倉沢篤史¹・土屋正史²・豊福高志²・北里洋²・西弘嗣¹

9:45-10:00 2C04 (04-04)

テリ海溝とトンガ海溝沖のブレスポット火山 (1 東北大学・2 早稲田大学・3 海
 洋研究開発機構) ○平野直人¹・町田嗣樹²・阿部なつ江³

10:00-10:15 2C05 (04-05)

南米パタゴニア沿岸台地のアルカリ玄武岩とマントル捕獲岩の希ガス同位
 体比 (1 東京大学・2 リオデジャネイロ州立大・3 神奈川県立生命の星・地球
 博物館・4 パタゴニア国立大・5 リオグランド・スル連邦大学・6 筑波大学) ○
 角野浩史¹・折橋裕二²・元木昭寿³・平田大二⁴・ハラミ ミジェル⁵・コンセ
 ション ロムロ⁶・安間了⁶・長尾敬介¹

10:15-10:30 2C06 (04-06)

人工衛星搭載 ASTER センサを用いたチリ共和国 Viedma 火山における
 SiO₂ 量推定 (1財)資源・環境観測解析センター・2 東京大学地震研究所・3
 神奈川県立博物館・4 SERNAGEOMIN, Chile・5(株)ダイヤコンサルタント・6 筑
 波大学) ○小林千明¹・折橋裕二²・平田大二³・ナランホ ホセ⁴・小林洋⁵・
 安間了⁶

10:30-10:45 2C07 (04-07)

定常的な沈み込み帯から中央海嶺沈み込みに至る南部アンデス弧(SVZ)
 火山岩類の化学組成の変遷 (1 東京大学・2 東京経済大学・3 テリ山局・4
 リオデジャネイロ州立大学・5 筑波大学) ○折橋裕二¹・新正裕尚²・ナランホ
 ホセ³・元木昭寿⁴・安間了⁵

<休憩>

10:55-11:10 2C08 (04-08)

中央海嶺沈み込みに伴う花崗岩の地球科学的特徴 (1 産業技術総合研究
 所・2 東京大学・3 筑波大学・4 京都大学・5 東京工業大学) ○昆慶明¹・小宮
 剛²・安間了³・平田岳史⁴・丸山茂徳⁵

11:10-11:25 2C09 (04-09)

海嶺沈み込みと大陸地殻の成長: テリ海嶺沈み込み帯の例 (1 筑波大学・2
 総合地球環境学研究所・3 東京大学) 安間了¹・○中ギョウ²・折橋裕二³・
 中野孝教²

11:25-11:40 2C10 (04-10 招待)

長期観測型海底地震計を用いたチリ三重合点付近における地震観測
 (1 東京大学・2 海洋研究開発機構・3 コンセプション大学・4 東京工業大学) ○
 篠原雅尚¹・山田知朗¹・杉岡裕子²・伊藤重紀³・ミラー マシュー⁴・一瀬建日
¹・バタイユ クラウス³・岩森光⁴

11:45-12:00 2C11 (04-11)

中央インド洋(15°-18° S)の中央海嶺軸玄武岩の希ガス同位体組成 (1 岡
 山大学・2 東京大学・3 新潟大学大学院・4 早稲田大学) ○松本拓也¹・折橋
 裕二²・宮川千絵³・根尾夏紀⁴・町田嗣樹⁴・玉木賢策²

12:00-12:20 2C12 (04-12 招待)

中央インド洋海嶺で第3, 第4の熱水活動域を発見 (1 海洋研究開発機構・
 2 高知大学・3 東京大学・4 川口慎介¹・中村謙太郎¹・高井研¹・野口拓郎²・
 折橋裕二³・佐野有司³・玉木賢策⁴

D会場 (A205)

セッション 20. 大気水圏地球化学(全般)
 コピーナー: 大隅多加志(電力中央研究所)

10:00-10:15 2D01 (20-01)

凝集が引き起こす沈降速度と溶解速度の変化による、沈降粒子中の希土
 類元素組成の体系化 (1 九州大学大学院理学研究科・2 理化学研究所) ○
 赤木右¹・本郷やよい²・高橋幸三¹

10:15-10:30 2D02 (20-02)

駿河湾における内石炭の出現特性 (東海大学) ○藤原直樹・千賀康弘・
 仁木将人・杉本隆成

10:30-10:45 2D03 (20-03)

日本海側地点(長崎県松浦市)における微量元素の乾性沈着フラックスとそ
 の変動要因 (1 静岡県立大学・2 電力中央研究所) ○坂田昌弘¹・朝倉一雄²

10:45-11:00 2D04 (20-04)

高知市中心部における降水の化学的特徴 (高知女子大学) ○一色健司

11:00-11:15 2D05 (20-05)

環境 ¹³C 濃度の経年および場所変動: 植物に固定された炭素の ¹³C 濃度解
 析(2) (名古屋大学年代測定総合研究センター) ○中村俊夫・太田友子・南
 澄代

E会場 (A202)

セッション 3. 宇宙地球有機物とアストロバイオロジー

コンピーナー: 小林憲正(横浜国立大学)・三田肇(福岡工業大学)

9:00-9:20 2E01 (03-01 招待)

地球外物質の炭素と水: 同位体組成と化学進化 (九州大学) ○奈良岡浩

9:20-9:40 2E02 (03-02 招待)

母天体上の衝撃作用がおよぼす、隕石有機物のユニークな構造特徴と同位体組成 (1) 大阪大学・2 カネギー研究所・3 ローレンスバークレー国立研究所○荻田ひかる 12・アレクサンダー コーネル 2・フォーグル マリリン 2・キルコイン デイビッド 3・コーティ ジョージ 2

9:40-10:00 2E03 (03-03 招待)

カイラリティーと化学進化 (神戸大学) ○中川和道

10:00-10:20 2E04 (03-04 招待)

宇宙空間の円偏光およびスピル偏極電子放射と生命ホモキラリティー起源 (NTT) ○高橋淳一

10:20-10:40 2E05 (03-05 招待)

国際宇宙ステーションと火星における微生物探査 (東京薬科大学) ○山岸明彦

10:40-11:00 2E06 (03-06 招待)

惑星間環境下での地球外有機物の生成と その地球への伝搬の評価 (1) 横浜国立大学・2 福岡工業大学・3 東京薬科大学・4 宇宙航空研究開発機構) ○小林憲正 1・伏見英彦 1・Sarker Palash Kumar 1・小野恵介 1・大林由美子 1・金子竹男 1・三田肇 2・山岸明彦 2・たんぽぽ WG 4

<休憩>

11:10-11:25 2E07 (03-07)

たんぽぽ捕獲粒子の有機物分析にむけた超高感度アミノ酸分析法の開発 (1) 福岡工業大学・2 九州大学・3 横浜国立大学・4 大阪大学・5 長岡技術大学・6 兵庫県立大学・7 金沢大学・8 東京薬科大学・9 宇宙航空研究開発機構) ○三田肇 1・百瀬恭子 1・浜瀬健司 2・三次百合香 2・小野恵介 2・Sarker Palash Kumar 2・小林憲正 3・荻田ひかる 4・今井栄一 2・内海裕一 5・奥田恭子 1・河口優子 6・横堀伸一 6・山岸明彦 8・たんぽぽ WG 9

11:25-11:45 2E08 (03-08 招待)

隕石衝突による有機物生成の初期地球への影響 (1) 東北大学・2 広島大学・3 物質材料研究機構) ○古川善博 1・関根利守 2・大庭雅寛 1・掛川武 1・中沢弘基 3

11:45-12:00 2E09 (03-09)

海洋堆積物の生成環境模擬実験における混合アミノ酸の重合と安定性 (東北大学) 高橋拓人・○大竹翼・古川喜博・掛川武

12:00-12:15 2E10 (03-10)

模擬原始大気実験生成物からの高温高圧環境下での有機物凝集体の生成 (1) 横浜国立大学・2 海洋研究開発機構) ○栗原広成 1・平子智草 1・高野淑恵 2・大林由美子 1・金子竹男 1・小林憲正 1

9月8日(第2日)ポスターセッション
P会場(スポーツキューブ1階)、コアタイム 13:00~14:00

セッション 21. その他の地球化学

2P01 (21-P01)

長良川河口堰の底泥、水、けん濁物に含まれる重金属について(名古屋大学) ○藤本達・上野操一郎・杉谷健一郎

2P02 (21-P02)

2012 国際地学オリンピック日本大会と地球化学(関東学院大学) ○瀬上豊

2P03 (21-P03)

キャピタリウム分光法による水同位体の分析(総合地球環境学研究所) ○丸山誠史・中野孝教

セッション 19. 固体地球化学(全般)

2P04 (19-P01)

福岡県東部、彦山川~城井川流域の地球化学図(福岡大学・九州大学大学院) ○柳原雅樹・伊藤吉宏・吉本敏・眞崎求一

2P05 (19-P02)

希ガス質量分析を用いた極微量ハロゲンの検出(東京大学・学習院大学) ○齋藤健彦・角野浩史・馬上一・遠山知亜紀・村松康行・長尾敬介

2P06 (19-P03)

変成岩における物質移動量の定量的解析の新手法 -三波川帯 Garnet-amphibolite 岩体を例として- (東京工業大学・東京大学) ○宇野正起・島崎光弘

2P07 (19-P04)

カンラン石、メージャライトガーネット/ペリドタイトメルト間における分配係数の圧力依存性(東京工業大学・海洋研究開発機構・京都大学) ○今井崇暢・高橋栄一・鈴木敏弘・平田岳史

セッション 4. 南太平洋・パタゴニア地域の地球科学総合研究

2P08 (04-P01)

パタゴニア北部、超青斑域に分布するソムクラ台地玄武岩の成因: ウォズリアイトの脱水溶融起因説(東京大学・リオデジャネイロ州立大学・パタゴニア国立大学・筑波大学) ○折橋裕二・元木昭寿・ハラー ミゲール・角野浩史・長尾敬介・安間了

2P09 (04-P02)

「みらい」MR08-06 Leg1 海半球完全横断航海報告(海洋研究開発機構・産業技術総合研究所・東京工業大学・筑波大学・東北大学・東京大学) ○阿部なつ江・金松敏也・末次大輔・山崎俊嗣・岩森光・安間了・平野直人・折橋裕二・原田尚美・富士原敏也

セッション 3. 宇宙地球有機物とアストロバイオロジー

2P10 (03-P01)

宇宙での微生物捕集実験における微生物解析方法・技術開発 有機物・微生物の宇宙曝露と宇宙塵・微生物の捕集実験(たんぽぽ)(東京理科大学・玉川大学・横浜国立大学・JAXA/ISAS・長岡技術短期大学・千葉大学・会津大学) ○河口優子・杉野朋弘・橋本浩一・吉村義隆・辻典・小林直正・田端誠・橋本博文・今井栄一・河合秀幸・奥平恭子・山下雅道・矢野誠・橋本伸一・山岸明彦

2P11 (03-P02)

前生物的条件下で生成するポリアミンの解析(福岡工業大学・筑波大学) ○桑原裕典・金丸博・三田望・野本信也

2P12 (03-P03)

粘土鉱物中でのポリリジン生産と生産した有機-無機複合体の物性(福岡工業大学) ○鶴山真美・宮元展義・三田望

2P13 (03-P04)

アルカリ熱水中でのグリシン二量化速度における金属イオンの効果(大阪大学) ○坂田霞・藤田ひかる

セッション 20. 大気水圏地球化学(全般)

2P14 (20-P01)

鉛-210 堆積年代測定法による中国黄河沖の堆積速度(産業技術総合研究所・中国海洋大学) ○金井豊・斎藤文紀・楊作升・范徳江

2P15 (20-P02)

植物プランクトン中の微量金属濃度の測定法に関する検討(静岡県立大学大学院・静岡県立大学・東海大学) ○山田将喜・坂田昌弘・光延聖・千賀康弘

2P16 (20-P03)

2010 年に東大阪市で捕集された黄砂粒子の個別粒子分析(近畿大学) ○坂本敏史・藤原司・中口謙・佐野到・向井苑生

2P17 (20-P04)

日本海沿岸における Pb-210 と Be-7 の時空間的変動(広島大学・金沢大学理日本海環境研究センター・上智大学 理工学部) ○坂口綾・山本政盛・廣瀬謙己

2P18 (20-P05)

硫酸イオンの現場捕集濃縮法を用いた屋久島の溪流河川における硫酸同位体比の測定(滋賀県立大学・豊橋技術科学大学・九州大学・岡山大学大学院) ○土井崇史・永瀬修・横田 久里子・吉村和久・阿久根卓・山中寿朗・宮部俊輔

2P19 (20-P06)

名古屋市における大気粉塵中の ¹³C 濃度(名古屋大学大学院・名古屋大学・名古屋市環境科学研究所) ○本庄浩司・中村俊夫・池盛文敬・山神真紀子

2P20 (20-P07)

南米ペルーの樹木に残る枝葉の記録(静岡大学・東京大学・三井金属資源開発(株)) ○奥田啓太・和田秀樹・松崎浩之・藤井昇

セッション 17. 土壌・陸域生態系の物質循環

2P21 (17-P01)

森林土壌における微量ガス交換量の変動性(国立環境研究所) ○高橋幸・梁乃申

2P22 (17-P02)

非耕作地の人為的管理が植物種構成と炭素分配に与える影響: 瀬戸内地域の圃場実験(農研機構・近畿中国四国農業研究センター) ○下田星児

2P23 (17-P03)

ハロゲン元素の土壌中濃度分析と土壌への蓄積メカニズムについて(学習院大学・東京大学・広島大学) ○伊藤絵理佳・村松康行・松崎浩之・高橋嘉夫・嶋本洋子

2P24 (17-P04)

名古屋市藤前干潟の底質と底生微細藻類に関する地球化学的研究(名古屋大学) ○山本真里子・上野操一郎・杉谷健一郎

2P25 (17-P05)

波長分散型蛍光 X 線分析法による植物体化学組成分析の試み(名古屋大学) ○上野操一郎・杉谷健一郎・小野森弘

セッション 10. 大気微量成分の地球化学

2P26 (10-P01)

大気中酢酸の分子内炭素安定同位体比測定(東京工業大学・キリンホールディングス株式会社) ○菊池麻希子・山田桂太・服部良太・吉田尚弘

2P27 (10-P02)

PTR-MS を用いたプロファイル法による DMS およびアセトンの大気-海洋間フラックス測定(北海道大学・国立環境研究所・岡山大学) ○亀山宗彦・吉田怜・谷本浩志・猪俣敏・岩田敏

2P28 (10-P03)

2010 年春季に福岡、合肥で採取した黄砂粒子中の鉄の形態解析(九州大学・中国科学技術大学) ○金子誠・仲松有紀・古川雅志・Zhouqing Xie・宇都宮聡

2P29 (10-P04)

都市大気微粒子中の鉄の化学状態(九州大学) ○仲松有紀・金子誠・古川雅志・西田千春・宇都宮聡

2P30 (10-P05)

北京北部マンジャンの大気エアロゾル中ジカルボン酸類の濃度と組成変化(北海道大学) ○何楠楠・河村公隆

2P31 (10-P06)

反気動物起源メタンの安定同位体比の日変動と要因解明 (『東京工業大学・²高産草地研究所) ○今藤泰輔¹・山田柱太¹・野中最子²・永西修²・樋口浩二²・真貝拓三²・小林洋介²・吉田尚弘¹

2P32 (10-P07)

成層圏硫酸循環の解析を目的としたアイソトポマーモデルの開発 (『東京工業大学・²名古屋大学・³海洋研究開発機構) ○古川知里¹・ダニエラ・セバスチアン¹・上野雄一郎¹・須藤健悟²・石島健太郎³・滝川雅之³・吉田尚弘¹

セッション 1. 同位体効果研究の地球化学への応用

2P33 (01-P01)

後期太古代 Hamersley 地域頁岩中のイオウ同位体分別 (九州大学) ○森脇絵美・奈良岡浩

2P34 (01-P02)

P-TIMS を用いた微量ホウ素の同位体比精密分析 (『(株)マリン・ワーク・ジャパン・²海洋研究開発機構) 永石一弥¹・松岡淳¹・石川剛志²

2P35 (01-P03)

多重検出型 ICP 質量分析計を用いた高精度ホウ素同位体比の迅速測定の実験 (『(株)マリン・ワーク・ジャパン・²海洋研究開発機構) ○永石一弥¹・谷水雅治²

2P36 (01-P04)

重酸化窒素の光分解反応による同位体濃縮現象の理論的評価 (上智大学) ○遠藤多慶人・南部伸孝

2P37 (01-P05)

成層圏硫酸エアロゾル: アイソトポマーを用いた硫酸循環解析 (『東京工業大学・²コペンハーゲン大学) ○ダニエラ・セバスチアン¹・榎部祥平¹・古川知里¹・上野雄一郎¹・ジョンソン マット²・吉田尚弘¹

セッション 18. 宇宙惑星化学(全般)

2P38 (18-P01)

¹⁴⁷Sm の半減期が Pb-Pb 年代測定に与える影響を評価 (東京大学) ○山田明憲・杉浦直治・比屋根肇

セッション 13. 初期太陽系円盤の宇宙化学

2P39 (13-P01)

炭素質コンドライト中の高温凝縮鉱物の Sm 同位体組成 (『広島大学・²国立科学博物館) ○池田直子¹・日高洋¹・米田成一²

セッション 14. 惑星・衛星・小惑星の宇宙化学

2P40 (14-P01)

多環芳香族炭化水素(PAH)の変質と同位体比変化 (九州大学) ○村井彰宏・奈良岡浩

2P41 (14-P02)

火星隕石 ALH84001 中のリン酸塩鉱物の U-Pb 年代 (『東京大学大学院・²東京大学大気海洋研究所) ○太田祥宏¹・高畑直人²・杉浦直治¹・佐野有司²

2P42 (14-P03)

月隕石 NWA4485 のジルコン U-Pb 年代からわかる月の KREEP マグマ活動期間 (『千葉工業大学・²国立極地研究所・³海洋研究開発機構・⁴ワシントン大学) ○荒井朋子¹・吉武美和²・富山隆将³・新藤隆史⁴・横山立憲²・海田博司²・三澤啓司²・アービング トニー⁴

セッション 8. マントル物質の化学とダイナミクス

2P43 (08-P01)

ウダチナヤキンバーライト産ダイヤモンドの希ガス同位体組成 (『東京大学・²東京大学理学系研究科・³ノボシビルスク岩石鉱物研究所) ○田子修也¹・角野浩史¹・松藤京介²・ゼドゲニゾフ ドミトリー³・健裕之²・長尾敬介¹

セッション 11. 水-鉱物界面の地球化学

2P44 (11-P01)

水深変化に伴うマンガンクラストの化学組成変動 (『広島大学・²高知大学) ○杉山敏基¹・坂口綾¹・高橋嘉夫¹・柏原輝彦¹・大石泰子¹・臼井朗²

9月8日(第2日)午後
アカデミックキューブ A101 会場

総会

14:00 - 15:30

受賞講演

15:45-16:05 2J01(奨励賞)

先進的表面錯体モデリングによる酸化物への銩イオン吸着挙動の予測

○福士圭介(金沢大学)

16:05-16:35 2J02(学会賞)

EPMA によるウラン、トリウム-鉛化学アイソクロン年代測定法の開発と鉱物粒子年代測定への展開

○鈴木和博(名古屋大学)

16:35-17:05 2J03(柴田賞)

海洋を介した物質循環と気候変化に関する研究

○角皆静男(北海道大学)

A 会場

セッション 17. 土壌・陸域生態系の物質循環

コンピーナー: 高橋善幸(国立環境研究所)・杉本敦子(北海道大学)

9:00-9:15 3A01 (17-01)

簡易品集積法を用いた群落スケールでの森林のメタンフラックス計測 (1 大阪府立大学大学院・2 国立環境研究所) ○植山雅仁¹・豊谷憲¹・西村渉¹・高橋善幸²

9:15-9:30 3A02 (17-02)

東シベリアタイガ林における大気水蒸気に対する蒸散の寄与 (1 北海道大学大学院環境科学院・2 北海道大学大学院地球環境科学研究院) ○上田哲大¹・杉本敦子²

9:30-9:45 3A03 (17-03)

鉛同位体組成による日本の穀物に含まれる鉛の起源推定 (財団法人日本穀物検定協会) ○有山薫・篠崎美由起

9:45-10:00 3A04 (17-04)

観測サイトの共有とネットワーク化による大気・陸域生態系間の温室効果気体/反応性気体の交換過程の観測研究の新たな展開 (1 国立環境研究所・2 農業環境技術研究所) ○高橋善幸¹・三枝信子¹・宮田明²

セッション 10. 大気微量成分の地球化学

コンピーナー: 谷本浩志(国立環境研究所)・齊藤拓也(国立環境研究所)・遠嶋康徳(国立環境研究所)・角智潤(北海道大学)

10:00-10:30 3A05 (10-01 招待)

人工衛星による対流圏 NO₂・エアロゾルの観測 -東アジアにおけるトレンド解析に着目して- (海洋研究開発機構) ○入江仁士

10:30-11:00 3A06 (10-02 招待)

衛星観測を用いたアジアにおける大気化学研究 (国立環境研究所) ○谷本浩志

11:00-11:15 3A07 (10-03)

2009 年川崎大気粒子状物質中の ²¹⁰Pb、⁷Be 及び微量元素の定量とその挙動 (東京都市大学大学院) ○牧内秋恵・本多照幸

11:15-11:30 3A08 (10-04)

つくばにおける降下物中のトリウム同位体の長期挙動について (1 上智大学・2 気象研究所) ○廣瀬勝己¹・木川田喜一¹・五十嵐康人²

11:30-11:45 3A09 (10-05)

大気降下物のウラン同位体比の季節変動 (1 上智大学・2 東京工業大学) ○山内理恵子¹・木川田喜一¹・野村雅夫²・広瀬勝己¹・大井隆夫¹

11:45-12:00 3A10 (10-06)

南鳥島および与那国島における大気中ラドンの観測と輸送過程の解析 (1 気象大学校・2 気象研究所・3 産業技術総合研究所) ○和田晃¹・松枝秀和²・坪井一寛³・澤廣介²・村山昌平³・近藤裕昭³・田口彰一³

C会場 (A204)

セッション 1. 同位体効果研究の地球化学への応用

コンピーナー: 武蔵正明(首都大学東京)・大井隆夫(上智大学)・野村雅夫(東京工業大学)

9:00-9:20 3C01 (01-01 招待)

平衡及び非平衡反応における硫黄の同位体効果と質量依存性の理論的研究(東北大学) ○大竹翼

9:20-9:35 3C02 (01-02)

ホウ酸とホウ酸イオン間におけるホウ素同位体効果の圧力依存性(1) 上智大学大学院・2 首都大学東京・3 東京大学大学院・4 上智大学) ○市川寛之¹・武蔵正明²・松尾基之³・大井隆夫⁴

9:35-9:50 3C03 (01-03)

イオン交換平衡におけるアンチモン同位体効果研究(1) 首都大学東京・2 上智大学・3 東京大学大学院) ○武蔵正明¹・市川寛之²・小豆川陽見³・松尾基之³・大井隆夫²

9:50-10:05 3C04 (01-04)

スズ同位体分析法の開発とその考古学的应用(1) 東京工業大学大学院・2 東京大学地震研究所) ○山崎絵里香¹・中井俊一²

10:05-10:20 3C05 (01-05)

モリブデン同位体比に基づく古日本海酸化還元状態の変動(1) 京都大学・2 高知大学) ○森島唯¹・西田真輔¹・中川裕介¹・宗林由樹¹・平田岳史¹・村山雅史²

10:20-10:35 3C06 (01-06)

後期始生代の堆積岩中に見られるイオウ質量非依存同位体分別(MIF-S)の特徴(1) 九州大学・2 ネバダ大学リノ校) ○奈良岡浩¹・森脇絵美¹・ポールソン サイモン²

10:35-10:55 3C07 (01-07 招待)

波長依存同位体効果と地球初期大気(東京工業大学) ○上野雄一郎・ダニエラ・セバスチャン・吉田尚弘

10:55-11:15 3C08 (01-08 招待)

光解離反応における同位体分別に関する理論研究(1) 上智大学・2 東京大学・3 レブデフ物理研究所・4 新潟大学) ○南部伸孝¹・山田明憲¹・井澤孝宏¹・小澤直斗¹・Kondorskiy Alexey D.²・小嶋稔²・徳江都雄⁴

セッション 18. 宇宙惑星化学(全般)

コンピーナー: 横山哲也(東京工業大学)・荒井朋子(千葉工業大学)

11:15-11:30 3C09 (18-01)

OK コンドライトの全岩化学組成(首都大学東京大学院) ○伊佐美紀・海老原克

11:30-11:45 3C10 (18-02)

LLコンドライト中に含まれるアルカリ元素に富む岩片(1) 総合研究大学院大学・2 国立極地研究所・3 岡山大学) ○横山立憲¹・三澤啓司²・岡野修³

11:45-12:00 3C11 (18-03)

次期月探査計画 SELENE-2 の着陸地検討状況(1) 千葉工業大学・2 大阪大学・3 国立天文台・4 宇宙航空研究開発機構・5 早稲田大学・6 海洋研究開発機構・7 会津大学) ○荒井朋子¹・佐伯和人²・荒木博志³・石原吉明³・大竹真紀子⁴・唐牛謙⁵・小林直樹⁶・杉原孝充⁶・泰山純一⁶・本田親寿⁷

D会場 (A205)

セッション 8. マントル物質の化学とダイナミクス

コンピーナー: 下田玄(産業技術総合研究所)・小木曾哲(京都大学)・鈴木勝彦(海洋研究開発機構)

9:00-9:15 3D01 (08-01)

スラブ融解を起源とするマグマと EM1 と EM2 の関連(産業技術総合研究所) ○下田玄

9:15-9:30 3D02 (08-02)

アフター・マントルブルームの地球化学的特徴とジオダイナミクス(琉球大学) ○メシェンヤ ダニエル・新城竜一

9:30-9:45 3D03 (08-03)

四万十帯砂岩中ジルコンの CHIME 年代分布が示唆する砕屑物の起源(1) 名古屋大学大学院・2 名古屋大学年代測定総合研究センター) ○城森由佳¹・南雅代²・鈴木和博²・竹内誠¹

9:45-10:00 3D04 (08-04)

キンバーライトのハロゲン元素組成 -南アフリカ・中国・グリーンランド- (1) 学習院大学・2 京都大学・3 東京大学) ○遠山知重¹・村松康行¹・山本順司²・角野浩史³・中井俊一³・兼岡一郎³

セッション 9. ナノジオケミストリー・地球科学にまつわる基礎化学

コンピーナー: 鎌裕之(東京大学)・宇都宮聡(九州大学)・太田充恒(産業技術総合研究所)・小木曾哲(京都大学)・鈴木勝彦(海洋研究開発機構)

10:00-10:30 3D05 (09-01 招待)

微生物による重元素の化学状態変化に伴う鉱物化(1) 日本原子力研究開発機構・2 東京工科大学・3 九州大学) ○田中万也¹・鈴木義規²・姜明玉³・宇都宮聡³・大貫敏彦¹

10:30-10:45 3D06 (09-02)

酵母による Yb ナノ鉱物生成機構の解明(1) 九州大学理学府・2 日本原子力研究開発機構) ○姜明玉¹・大貫敏彦²・田中万也²・香西直文²・上石峻佑¹・宇都宮聡¹

10:45-11:15 3D07 (09-03 招待)

カルサイト溶解の各素過程に及ぼす生体分子の影響(東大院理) ○吉野徹・鎌裕之

11:15-11:30 3D08 (09-04)

アスパラギン酸添加による非晶質炭酸カルシウムの安定化(東京大学大学院) ○丸山浩司・吉野徹・鎌裕之

11:30-11:45 3D09 (09-05)

大気ナノ粒子の重金属化学種(1) 九州大学大学院・2 九州大学・3 中国科学技術大学) ○宇都宮聡¹・仲松有紀²・金子誠²・古川雅志³・Zhouqing Xie³

11:45-12:00 3D10 (09-06)

逐次溶解法と XAFS 法を用いた地質標準試料中の Cu の存在形態の研究(1) 産業技術総合研究所・2 東京大学大学院) ○太田充恒¹・久保田蘭¹・鎌裕之²・石橋秀巳²

A会場 (A201)

セッション 10: 大気微量成分の地球化学

コンピーナー: 谷本浩志(国立環境研究所)・斎藤拓也(国立環境研究所)・
遠嶋康徳(国立環境研究所)・角皆潤(北海道大学)

13:00-13:15 3A11 (10-07)

北極海上及び海水中 ^{222}Rn 濃度を用いた大気-海洋間ガス交換速度の評価
(¹名古屋大学大学院・²岐阜大学) ○廣内淳¹・大屋紀之¹・森泉純¹・山
澤弘実¹・田阪茂樹²

13:15-13:30 3A12 (10-08)

西南日本北部九州背嶺山頂にて採取された風送塵(黄砂)の Sr・Nd 同位体
組成: 起源と季節変化の指標として (九州大学大学院) ○宮本知治・浜本
礼子・柳井

13:30-13:45 3A13 (10-09)

国内大気降下物に見出された濃縮ウランの起源に関する予察的考察
(¹上智大学大学院・²上智大学・³気象研究所・⁴農業環境技術研究所・⁵東京
工業大学・⁶モンゴル水文気象研究所) ○松本祐介¹・木川田喜一²・大井
隆夫²・赤峰生朗¹・廣瀬勝己³・五十嵐康人²・藤原英司⁴・野村雅夫⁵・
Jugder Dulam⁶

13:45-14:00 3A14 (10-10)

大気のヘリウム同位体比: 時間的・空間的変動 (東京大学) ○佐野有司・
古川由紀子・高畑直人

14:00-14:15 3A15 (10-11)

太平洋域における大気ポテンシャル酸素(APO)の季節変動および年平均
値の空間分布の解析 (国立環境研究所) ○遠嶋康徳・峰島知芳・向井人
史・町田敏暢・山岸洋明・野尻幸宏

14:15-14:30 3A16 (10-12)

定期貨物商船とキャピティリングダウン式分光計を用いた西部太平洋上
大気中の CO_2 と CH_4 の連続観測 (国立環境研究所) ○奈良英樹・谷本浩
志・野尻幸宏・向井人史・町田敏暢・遠嶋康徳

14:30-14:45 3A17 (10-13)

小笠原諸島・父島における海洋エアロゾルの長期観測: 2001-2009 年にお
ける低分子ジカルボン酸 (北海道大学) ○河村公隆・立花英里

14:45-15:00 3A18 (10-14)

韓国・済州島の気象エアロゾル中の陸源バイオマーカーの分子組成・安定
同位体組成により明らかにされた東アジアの長距離大気輸送パターンの
季節性 (¹北海道大学低温科学研究所・²高麗大学) ○山本真也¹・河村公
隆¹・Lee Meehye²

<休憩>

15:10-15:25 3A19 (10-15)

銅酸化による有機エアロゾルの凝結核としての働き抑制 (広島大学
大学院) ○古川丈真・高橋嘉夫

15:25-15:40 3A20 (10-16)

2009 年度夏期富士山頂における低分子ジカルボン酸の組成と起源に関す
る研究 (¹北海道大学大学院・²北海道大学低温科学研究所) ○藤原真太
郎¹・河村公隆²・宮崎雄三²

15:40-15:55 3A21 (10-17)

スギからの揮発性有機化合物放出量推計 (¹財団法人石油産業活性化セ
ンター・²静岡県立大学) ○松永壮¹・中塚誠次¹・望月智貴²・遠藤由希子²・
大野卓夫²・谷晃²

15:55-16:10 3A22 (10-18)

北海道落石岬における硫化カルボニルの連続観測 (国立環境研究所) ○
斎藤拓也・横内陽子・向井人史

16:10-16:40 3A23 (10-19 招待)

人工衛星による温室効果ガス観測 (¹千葉大学・²東京大学) ○斎藤尚子¹・
今須良一²

16:40-17:10 3A24 (10-20 招待)

静止衛星を用いた大気汚染観測の将来計画 (¹奈良女子大学・²海洋研究
開発機構・³情報通信研究機構・⁴茨城大学・⁵アジア大気汚染研究セン
ター) ○野口克行¹・入江仁士²・笠井康子²・北和之⁴・秋元肇⁵

C会場 (A204)

セッション 18. 宇宙惑星化学(全般)

コンピーナー: 荒井朋子(千葉工業大学)・横山哲也(東工科大学)

13:00-13:15 3C12 (18-04)

主成分元素組成から推定した隕石の ^{26}Al 生成量 (立正大学・² 東京大学)
○榎野葉理香¹・福岡孝昭¹・松崎浩之²

13:15-13:30 3C13 (18-05)

RBT 04261 レルザイト質シャープゴッタイトのウラン-鉛同位体年代 (総合研究大学院大学・² 国立極地研究所) ○新原隆史¹・三澤啓司²・堀江家路²・海田博司²

13:30-13:45 3C14 (18-06)

液体窒素温度での衝撃波によるベンゼンの反応 (名古屋大学) ○中村明博¹・三村耕一²

セッション 13. 初期太陽系内盤の宇宙化学

コンピーナー: 山下勝行(岡山大学)・伊藤正一(北海道大学)・橋省吾(東京大学)

13:45-14:00 3C15 (13-01)

初期太陽系形成時における ^{26}Al の不均質な分布 (学習院大学・² ハワイ大・³ シカゴ大) ○巻出健太郎¹・永島一秀²・クロット アレクサンダー²・ハスゲイリー³・ヘルブランド エリック²・ガイド エリック²・チェスラ フレッド²・ヤング リー³

14:00-14:15 3C16 (13-02)

始原隕石有機物に見られた酸素同位体比異常 (大阪大学・² 東京大学・³ 九州大学) ○橋爪光¹・高畑直人²・奈良岡浩³・佐野有司²

14:15-14:30 3C17 (13-03)

ウィガラノ CV3 隕石の Ca, Al, Fe に富む包有物 (総合地球環境学研究所・² 岡山大学) ○丸山誠史¹・富岡尚敬²

14:30-14:45 3C18 (13-04)

Fluffy Type A CAI のメリライト結晶の酸素同位体組成と酸素同位体組成の関係 (北海道大学) ○片山樹里・伊藤正一・坂本尚義

14:45-15:00 3C19 (13-05)

初期太陽系内盤の揮発性元素同位体進化 (東京大学) ○小嶋穂

<休憩>

15:10-15:25 3C20 (13-06)

惑星物質の同位体比に基づく遅い中性子捕獲反応の温度・密度条件への制約 (広島大学・² 日本原子力研究開発機構・³ 国立天文台・⁴ 東京大学) ○寺田健太郎¹・増田洋介¹・梶尾寛¹・岩本信之²・青木和光³・吉田敬⁴

15:25-15:40 3C21 (13-07)

始原的隕石の耐熱性残渣のオスミウム同位体異常から見た原始太陽系星雲と母天体プロセス (東京工業大学・² カーネギー研究所・³ メリーランド大学) ○横山哲也¹・アレクサンダー コーネル²・ウォーカー リチャード³

15:40-15:55 3C22 (13-08)

ユレイライトの Mn-Cr 年代測定 (岡山大学) 山川茜・山下勝行・牧嶋昭夫・中村栄三

セッション 14. 惑星・衛星・小惑星の宇宙化学

コンピーナー: 三浦秀生(東京大学)・橋省吾(東京大学)

15:55-16:10 3C23 (14-01)

ユレイライト隕石に含まれている炭素質のラマン研究 (大阪大学・² 東京医科大学) ○長島加奈¹・奈良雅之²・松田圭一²

16:10-16:25 3C24 (14-02)

タングステン安定同位体組成からみた IIIAB 鉄隕石とパラサイトメイトグループの関連性 (東京工業大学大学院・² 海洋研究開発機構・³ 日本原子力研究開発機構・⁴ 京都大学大学院) ○深澤雄介¹・木村純一²・入澤啓太³・横山哲也⁴・平田昌史⁴

16:25-16:40 3C25 (14-03)

Apollo17 号ボリミット角礫岩中のリン酸塩鉱物の起源と U-Pb 年代 (広島大学大学院・² オープン大学) ○梶川岳彦¹・寺田健太郎¹・Anand Mahesh²

16:40-16:55 3C26 (14-04)

南極ドーム Fuji 切羽氷中から得た 12 万年前の宇宙塵の降下量 (立正大学・² 青山学院大学) ○三浦秀生¹・斎藤裕子²・田澤雄二¹・福岡孝昭¹

D会場 (A205)

セッション 9. ナノジオケミストリー・地球科学にまつわる基礎化学

コンピーナー: 健裕之(東京大学)・宇都宮聡(九州大学)・太田克恒(産業技術総合研究所)

13:00-13:15 3D11 (09-07)

ナノ粒子の結晶化速度理論の重要性と概要 (産業技術総合研究所・² 東京大学) ○月村勝宏¹・鈴木正哉¹・鈴木康平¹・村上隆²

13:15-13:30 3D12 (09-08)

ポートランドセメント $\text{Ca}(\text{OH})_2$ の水素自己拡散の微視的機構 (京都大学・² 大阪市立大学) ○野口直樹¹・篠田圭司²

13:30-13:45 3D13 (09-09)

高圧下における異極性の水素結合と結晶構造の変化 (東京大学大学院) ○山口祐・飯塚理子・小松一生・健裕之

13:45-14:00 3D14 (09-10)

ランタニド・ニホ素化合物の標準生成エンタルピー・ヨルゲンセン・川通式から推定するラッカー・パラメーター (名古屋大学) ○川邊岩夫

セッション 11. 水-鉱物界面の地球化学

コンピーナー: 福士圭介(金沢大学)・光延聖(静岡県立大学)

14:00-14:15 3D15 (11-01)

蛍光分光 XAFS 法を用いたタングステン・鉄・鉄マンガン酸化物の固液分配および同位体比変動の考察 (広島大学大学院) ○柏原輝彦・高橋嘉夫

14:15-14:30 3D16 (11-02)

原油中の希土類元素(REE)存在度と水-原油間での REE の分配 (広島大学・² 中国科学院) ○中田亮一¹・高橋嘉夫¹・鄭国東²・清水洋¹

14:30-14:50 3D17 (11-03 招待)

鉱物表面・水・水溶液系の分子シミュレーション (東京工業大学) ○河村雄行

14:50-15:05 3D18 (11-04)

シリカの溶解におよぼす有機化合物の影響: カテコール誘導体 (九州大学大学院・² 群衆化学工業・³ 九州大学大学院) ○三谷駿介¹・江藤真由美¹・飯塚毅²・岡上吉広³・横山拓史²

15:05-15:20 3D19 (11-05)

二酸化炭素地中貯留に向けた玄武岩の溶解実験 (慶應義塾大学大学院・² 東京大学大学院) ○片山智弘¹・廣田直建¹・高谷雄太郎²・加藤泰浩²

<休憩>

15:30-15:45 3D20 (11-06)

動的分散法を用いた炭酸カルシウム結晶成長過程における粒径分布の観測 (防衛大学・² 東京大学) ○神谷泰津美¹・角森史昭²・健裕之²・野津家治²

15:45-16:00 3D21 (11-07)

カルサイトの結晶成長におけるアスパラギン酸の阻害メカニズムの解明 (東京大学大学院) ○古野敏・健裕之

16:00-16:15 3D22 (11-08)

地下水中のヒ素およびセレンの移行過程にカルサイトとの共沈反応が与える影響 (広島大学大学院) ○横山由佳・高橋嘉夫

16:15-16:30 3D23 (11-09)

腐植物質-鉱物相互作用の金属イオン吸着への影響: EXAFS 法による吸着イオン局所構造からの考察 (東京大学) ○斎藤拓巳

16:30-16:45 3D24 (11-10)

Ferrihydrite の相転移反応によってアンチモンは結晶構造内部へ固定化される (静岡県立大学・² 広島大学) ○光延聖¹・村松千尋²・高橋嘉夫²・坂田昌弘¹

16:45-17:00 3D25 (11-11)

Extended Triple Layer Model によるフェリハイドライトへの硫酸根吸着挙動の解析 (金沢大学大学院・² 金沢大学) ○青山和樹¹・福士圭介²

17:00-17:15 3D26 (11-12)

セシウムおよびセレンの BIOS への吸着: 無機的に生成した水酸化鉄との比較 (広島大学大学院・² 静岡県立大学・³ 海洋研究開発機構) ○菊池早希子¹・光延聖²・牧田寛子³・高橋嘉夫¹